市内遺跡発掘調査報告11
日田市埋蔵文化財調査報告書第107集

# 平 島 遺 跡

## ― E地点の調査報告 ―

2013 年

日 田 市 教 育 委 員 会

平島遺跡 ― E地点の調査報告 ―
日田市埋蔵文化財調査報告書第107集
2013年
日田市教育委員会

日田市

VEGETABLE OIL INK

調査地点と日田市街地（〇印が調査地点、写真上は市街地）

# 序　　文

平島遺跡は日田市東部の有田川沿いに位置し、これまでに数回の発掘調査を行い、市内でも数少ない弥生時代後期の環濠集落が確認されています。

このたび報告します平島遺跡Ｅ地点は、平島遺跡の範囲のなかでも最も南側の小高い場所に位置し、平成 10 年に発掘調査を行ったものです。

発掘調査では、弥生時代の竪穴住居や甕棺墓をはじめとして、古墳時代の古墳の石室、中世期の建物などの遺構と、こうした遺構から多くの遺物が出土しています。

平島遺跡Ｅ地点を含めた周辺では、有田塚ヶ原遺跡群、尾漕遺跡といった大規模な遺跡の発掘調査が数多く行われ、この地域の歴史が明らかになってきています。

本書が、こうした文化財の保護、地域の歴史や学術研究の解明、小中学生の社会教材資料等に寄与されれば幸いです。

最後に、調査にご協力いただきました土地所有者、発掘調査や整理作業に従事いただきました関係者の皆様方に対して、心より厚くお礼を申し上げます。

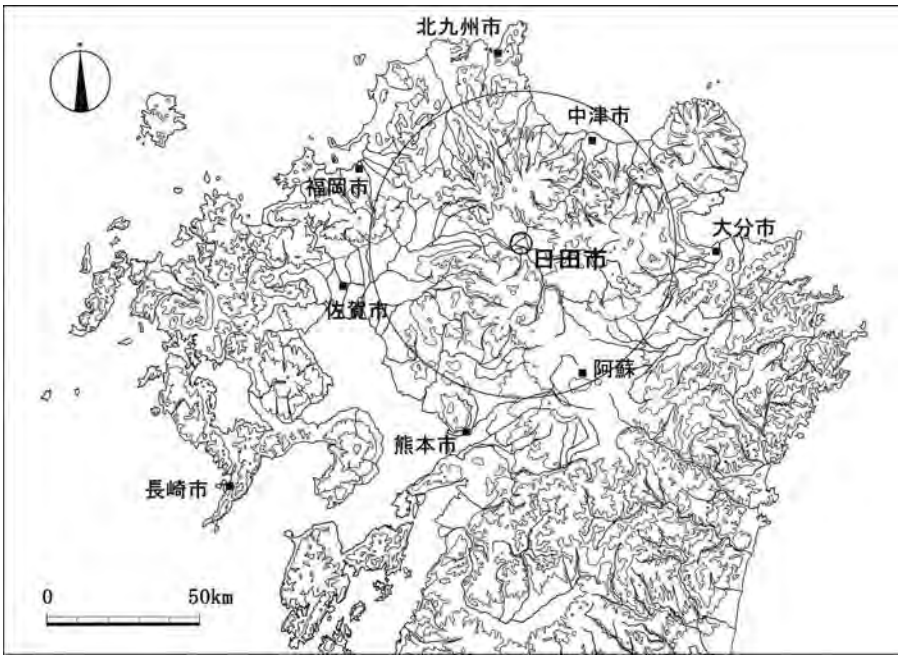
平成２５年２月

日田市教育委員会

教育長　合原 多賀雄

# 例　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成9・10年度に国庫・県費補助を得て実施した平島遺跡E地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査にあたっては、土地所有者の酒井　守氏のご協力をいただいた。
3. 発掘調査現場での実測・写真撮影は、調査担当者と調査員が行った。
4. 人骨の調査、取上げは、九州大学大学院の田中良之教授と金宰賢氏が行い、本書への調査報告の原稿提供をいただいた。
5. 本書に使用した遺構図の方位は、全て磁北である。
6. 本書に掲載の遺物実測・製図・写真は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用している。
7. また、本書の遺構図の整理、製図にあたっては、若杉、江藤由季、武石和美の各氏の協力をいただいた。
8. 写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
9. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 本書の執筆は、Ⅰ～Ⅲ・Ⅴを土居、Ⅳを舟橋京子・田中良之が行なった。
11. 本書の編集は、土居が行なった。




日田市の位置

# 本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
（1）発掘調査の経過 …… 1
（2）発掘調査の体制 …… 2

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3

Ⅲ　調査の内容 …… 5
（1）発掘調査の概要 …… 5
（2）遺構と遺物 …… 7

Ⅳ　甕棺出土人骨について …… 27

Ⅴ　総括 …… 29

# 挿　図　目　次

第 1 図　周辺の遺跡分布図（1/10,000） …… 4
第 2 図　調査区位置図（1/5,000） …… 5
第 3 図　調査区遺構配置図（1/200） …… 6
第 4 図　1 号竪穴住居実測図（1/60） …… 7
第 5 図　1 号竪穴住居出土遺物実測図（1/3） …… 8
第 6 図　2 号Ａ・Ｂ竪穴住居実測図（1/60） …… 9
第 7 図　2 号Ａ・Ｂ竪穴住居出土遺物実測図（1/3） …… 10
第 8 図　1 号掘立柱建物実測図（1/60） …… 11
第 9 図　2 号掘立柱建物実測図（1/60） …… 12
第 10 図　3 号掘立柱建物実測図（1/60） …… 13
第 11 図　4・5 号掘立柱建物実測図（1/60） …… 14
第 12 図　4 号掘立柱建物出土遺物実測図（1/3） …… 15
第 13 図　1 号土坑実測図（1/30） …… 16
第 14 図　1 号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 16
第 15 図　2 ～ 5 号土坑実測図（1/30） …… 17
第 16 図　1 号溝実測図（1/60） …… 18
第 17 図　2 号溝実測図（1/60） …… 19
第 18 図　3 号溝実測図（1/60） …… 20
第 19 図　1 ～ 3 号溝出土遺物実測図（1/3） …… 21
第 20 図　1 号甕棺墓実測図（1/20） …… 22

第 21 図　1 号甕棺実測図（1/6）……23
第 22 図　1 号石蓋土壙墓実測図（1/30）……24
第 23 図　1 号石室実測図（1/30）・1 号石室出土鉄器実測図（1/2）……25
第 24 図　一括遺物実測図（1/3）……26
第 25 図　平島遺跡 C・D 地点の遺構配置図（1/500）……29

## 表　目　次

第１表　出土土器観察表……15
第２表　出土鉄器観察表……15

## 写 真 図 版 目 次

巻頭カラー　調査地点と日田市街地
写真図版 1　調査地点空撮、調査地点遠景
写真図版 2　1・2 号竪穴住居、1 ～ 4 号掘立柱建物
写真図版 3　1・4 号土坑、1 ～ 3 号溝
写真図版 4　1 号甕棺墓、1 号石蓋土壙墓
写真図版 5　古墳石室
写真図版 6　古墳石室
写真図版 7　出土遺物
写真図版 8　出土遺物
写真図版 9　出土遺物
写真図版 10　出土遺物

## 挿 入 写 真 目 次

写真 1　発掘調査風景……1
写真 2　1 号甕棺墓の調査風景……1

# Ⅰ　調査に至る経過と組織

## （1）発掘調査の経過

この調査の発端は、平成９年度に平島遺跡Ｅ地点の土地所有者から畑地造成に伴う埋蔵文化財の届出が提出されたことに起因する。この行為に対して市教委では、Ｅ地点に先立って発掘調査を実施した隣接するＤ地点において甕棺墓などの墳墓が確認されており、Ｅ地点においても墳墓などの遺構が存在する可能性が高く、また畑地には土器片が散在しており、過去に土地所有者が開墾中に古墳の石室に使われたと思われる石が確認されている点などから、発掘調査を実施することにした。

調査は遺構が存在することを想定して畑地全面を対象に表土剥ぎを行うことにした。調査は平成 10 年 3 月 18 日から重機を使って始めたが、その日のうちに遺構が確認され、所有者への発掘調査への理解も得られたため、そのまま発掘調査に移行した。発掘調査は表土剥ぎ、遺構検出作業などを 26 日まで行い、予算が無くなったことから一旦調査を終了し、残りの発掘調査作業などは新年度に継続することになった。

平成 10 年度は、5 月 6 日より再開した。調査は遺構検出作業から進め、9 日からは主に調査区南側の遺構の掘り下げを始めた。以後、個別遺構の掘り下げ、写真撮影、実測の各作業を順次進めたが、5 月末から 6 月 10 日まで梅雨によって調査を一時中断した。6 月 11 日からは調査を再開し、23 日から調査区北側の遺構検出を始め、7 月 6 日には甕棺墓に人骨が残っていることを確認し、九州大学大学院の田中良之先生に調査、取上げを依頼した。8 日には石室内の埋土のフルイ作業を進め、11・12 日の甕棺墓出土人骨の取上げをもって全作業を終えた。

写真１　発掘調査風景

写真２　１号甕棺墓の調査風景

## (2) 発掘調査の体制

発掘調査等の関係者は、以下の通りである。

発掘調査／平成 9 年度 (1986)　※ 職名は当時のままとしている。

調査主体　　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊 ( 教育長 )

調査事務　　原田俊隆 ( 文化課課長 )　長尾幸夫 ( 同課長補佐兼文化財係長 )　森山一宏 ( 同主任 )

調査担当者　土居和幸 ( 文化課主任 )

調　査　員　行時志郎 ( 同主任 )、吉田博嗣、松下桂子 ( 以上、同主事 )、永田裕久 (同主事補)

発掘作業員　荏隈マサ子　梶原利徳　菅田クマエ　菅田初夫　菅田ミヤコ　高倉厚己　高倉ハナ子

発掘調査・整理作業／平成 10 年度 (1987)　※ 職名は当時のままとしている。

調査主体　　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊 ( 教育長 )

調査事務　　原田俊隆 ( 文化課課長 )　石井英信 ( 同課長補佐兼文化財係長 )　佐々木豊文 (同主査)

調査指導　　後藤宗俊、下村　智 (以上、別府大学) 、田中良之、金宰賢 (以上、九州大学大学院)
渋谷忠章、小林昭彦 (以上、大分県文化課)

調査担当者　土居和幸 ( 文化課主任 )

調　査　員　行時志郎 ( 同主任 )、吉田博嗣 ( 同主事 )、永田裕久 (同主事補) 、山路康弘 ( 同嘱託 )

発掘作業員　秋ヤエ子、諫山三代子　江藤キミ子　荏隈典子　荏隈マサ子　鍛冶谷アサヨ　梶原利徳　庄内武子　菅田クマエ　菅田初夫　菅田ミヤコ　高倉厚己　高倉ハナ子　高倉美津子　田中静香　吉長ハルエ

報告書作成／平成 24 年度 (2012)

調査主体　　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄 (日田市教育委員会教育長)

調査統括　　財津俊一 (文化財保護課課長)

調査事務　　井上和泉 (同埋蔵文化財係主査)

報告書担当　土居和幸 (同課埋蔵文化財係長)

調　査　員　行時桂子、若杉竜太、渡邊隆行 (以上、同主査) 、上原翔平 ( 同主事 )

## Ⅱ　遺跡の立地と環境

平島遺跡Ｅ地点は（3-5）日田市東部の標高約 140 ｍを測る通称“祇園原”と呼ばれる丘陵北部の裾部に位置する。標高約 120 ｍを測る調査区のすぐ背後には“祇園原”丘陵斜面が迫っており、前面は沖積地まで約 5 ｍの斜面となるなど、地形的には狭小な平坦地に立地する。前方には西流する有田川や沖積地、対峙する須ノ原台地などを展望することができる。

遺跡の西側には求来里川が北流しており、有田川と合流地点に近い場所に存在している。この 2 つの河川は台地や丘陵の合間を縫うように流れており、このため沖積地の面積は狭く、各々の上流部は急な谷部を形成し、丘陵や台地はこれまで主に畑地や山林として利用されてきた。

こうした環境下にある平島遺跡Ｅ地点の周辺遺跡（第 1 図を参照）を概観してみると、有田川流域では箱形石棺が主体部と考えられ現況測量において全長 29.9 ｍと推定される古墳時代中期の前方後円墳である城山古墳（1）や、未調査の円墳と推定されるクエト古墳 1・2 号墳（2）が所在する。

また、平島遺跡Ｅ地点背後の丘陵上や谷部には、弥生時代中期から後期の集落遺跡や近世墓地に代表される祇園原遺跡（6）や縄文時代早期と古墳時代、古代の集落遺構が発見された石ヶ迫遺跡（7）、6 ～ 7 世紀にかけて数多くの装飾品や武器類を副葬した 86 基の横穴が造営された平島横穴墓群（8）、古代の鍛冶関連遺構と遺物が調査されたクビリ遺跡（9）、縄文時代の落し穴遺構と古代の建物群が残る有田塚ヶ原遺跡（10）、同遺跡内に点在する有田塚ヶ原古墳（11・12）のうち 1 号墳（11）は調査によって横穴式石室を主体部とする直径 10 ｍほどの円墳であることが判明するなど、発掘調査事例の多い遺跡や古墳が集中してみられる。

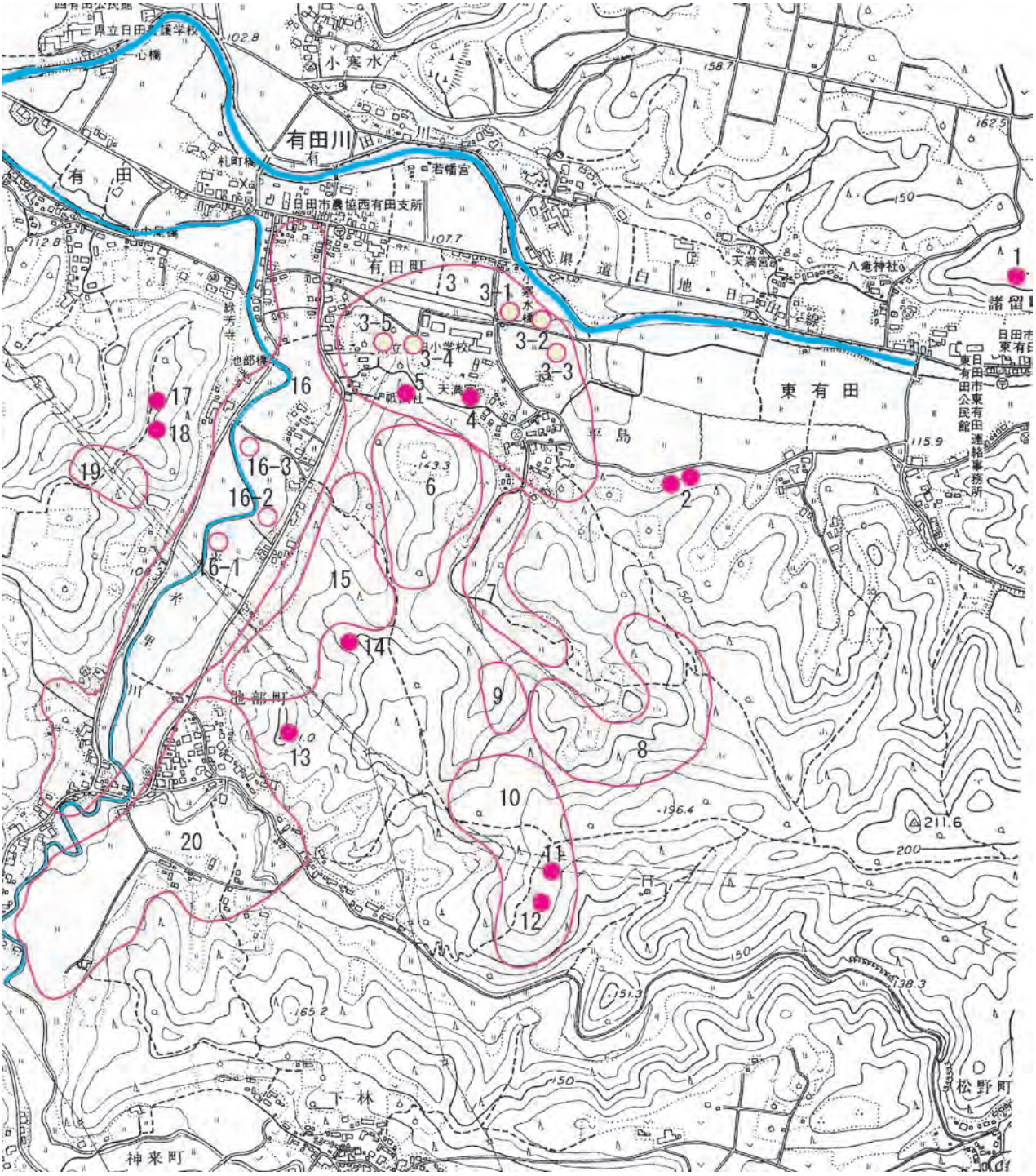
いっぽう求来里川下流域沿いでは、左岸丘陵上には未発掘調査であるが円墳からなる中尾古墳 1・2 号墳（17・18）や、古墳時代の土坑墓・石蓋土壙墓・石棺墓が発掘された大迫遺跡（19）が認められる。

河川沖積地には弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300 枚を超える六道銭を埋納した土坑墓などが発見され、これまでに複数回の発掘調査が実施されてきた尾漕遺跡（16-1 ～ 3）や、縄文時代晩期の埋甕や平安時代の竪穴遺構が発見された森ノ元遺跡（20）などが存在する。

右岸には丘陵頂部に営まれた尾漕古墳群では、単室の横穴石室を主体部とする古墳時代中期（5 世紀末）の 1 号墳（13）と、2 基の箱式石棺を主体部とする直径 25 ｍの円墳である古墳時代中期（5 世紀前半）の尾漕古墳 2 号墳（14）のほかに、古墳時代後期や奈良時代の集落遺構が発見された長迫遺跡（15）などが調査されている。このほかにも求来里川の中流域では、圃場整備事業に伴う発掘調査によって縄文時代から中世、近世の多くの遺跡が発見されている。

さて、平島遺跡（3）ではこれまでに 5 回の調査が行われ、Ａ～Ｅ地点と名付けられている。Ａ地点（3-1）では弥生時代終末期や古墳時代後期の竪穴住居などの遺構が重複してみられ、Ａ地点に隣接するＢ地点（3-2）では弥生時代終末期の環濠や同時期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居などが調査されており、両者は有田地域で唯一の弥生時代環濠集落遺跡である。Ｃ地点（3-3）では遺構が確認されていない。Ｄ地点（3-4）はＥ地点の東側に隣接しており、弥生時代の大型成人用甕棺墓・石棺墓などのほかに、古墳時代後期の円墳の周溝が確認されている。

また遺跡範囲内には未発掘調査であるが日田市史跡に指定されている円墳の平島古墳（4）や、単室両袖式の横穴石室を主体部とする直径 12 ｍの円墳である古墳時代後期（6 世紀前半）の塔ノ本古墳 1 号墳（5）といった 2 基の古墳が確認されている。




| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 城山古墳 | 6 | 祇園原遺跡 | 11 | 有田塚ヶ原古墳１号墳 | 16 | 尾漕遺跡 |
| 2 | クエト１・２号墳 | 7 | 石ヶ迫遺跡 | 12 | 有田塚ヶ原古墳２号墳 | 17 | 中尾１号墳 |
| 3 | 平島遺跡 | 8 | 平島横穴墓群 | 13 | 尾漕１号墳 | 18 | 中尾２号墳 |
| 4 | 平島古墳 | 9 | クビリ遺跡 | 14 | 尾漕２号墳 | 19 | 大迫遺跡 |
| 5 | 塔ノ本１号墳 | 10 | 有田塚ヶ原遺跡 | 15 | 長迫遺跡 | 20 | 森ノ元遺跡 |

**第１図　周辺の遺跡分布図（1/10,000）**

# Ⅲ　調査の内容

## （1）発掘調査の概要（第２・３図、写真図版１）

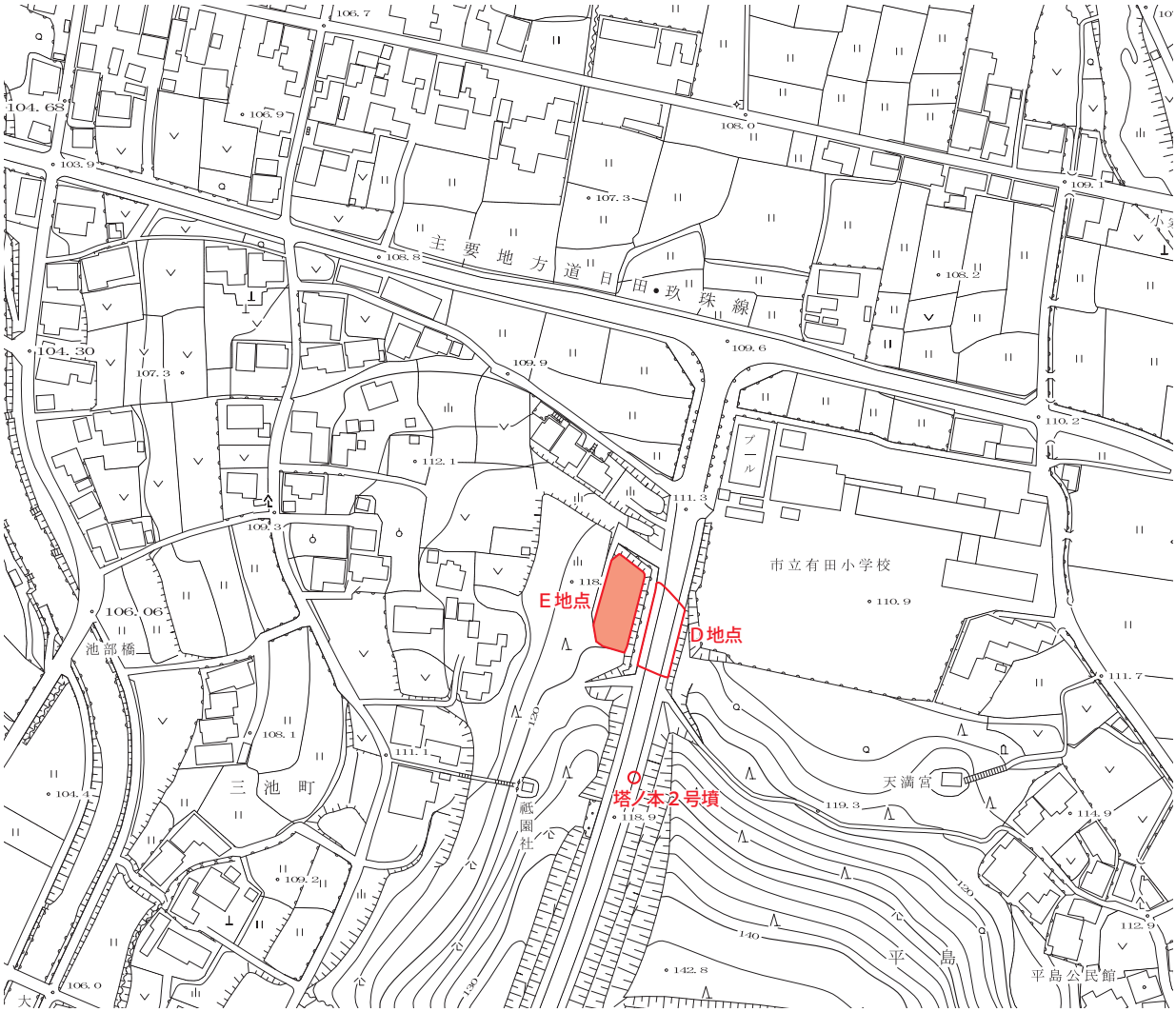
平島遺跡Ｅ地点の表土下は暗茶褐色のローム質土で、その下位には黄色のローム質土がみられた。後者の黄色ローム質土は、隣接する平島遺跡Ｄ地点の調査時の地山である。遺構検出面である暗茶褐色のローム質土は、調査区の南側から北側にかけて緩やかに傾斜しており、その高低差は最大約２ｍを測る。

遺構は調査区のほぼ全面に認められ、遺構の残りは決して良くなかったが、調査面積に比べると遺構密度は高いといえる。遺構埋土は黒色や暗茶色、茶色で、遺構検出は容易で判り易かった。

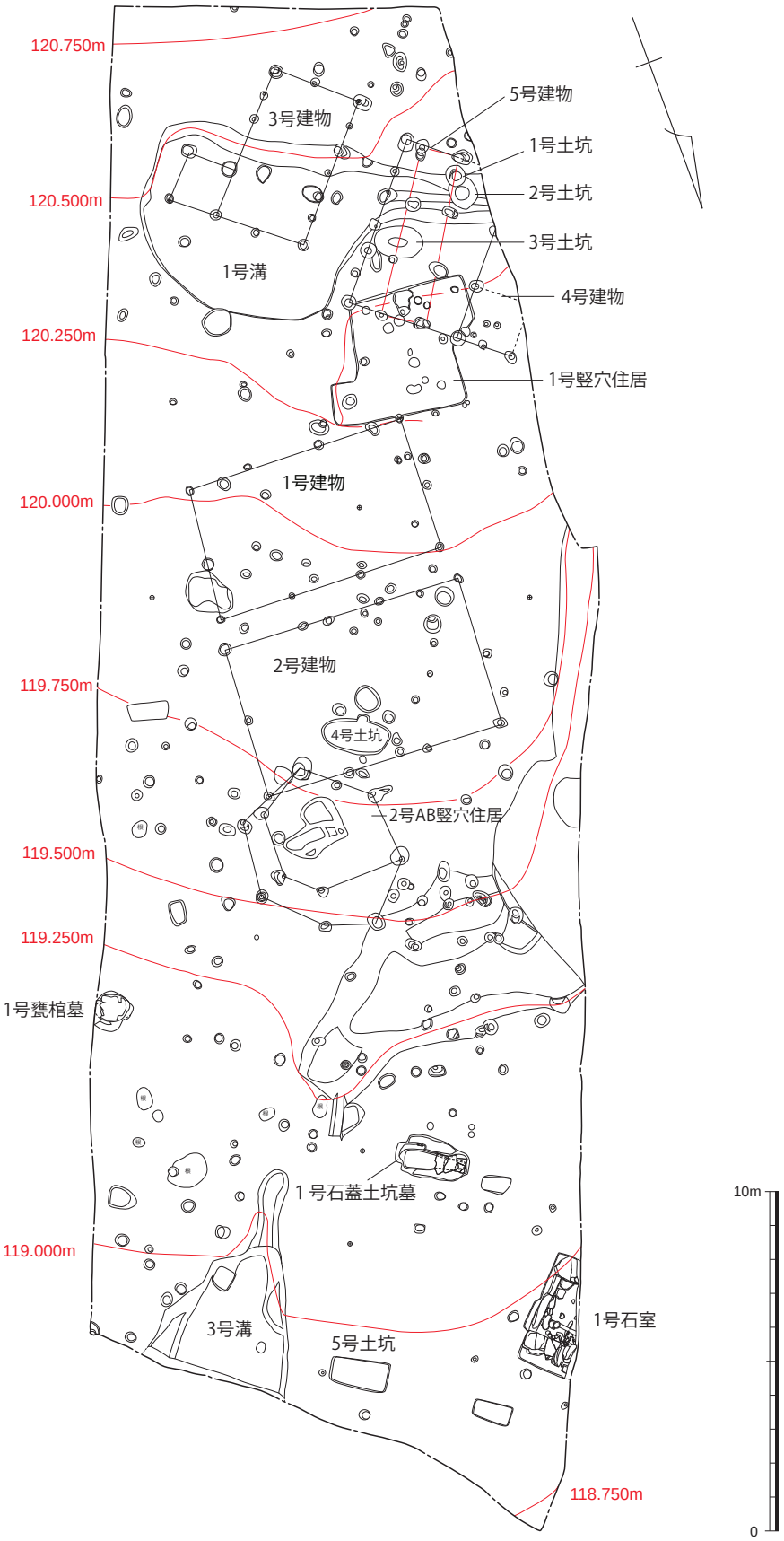
本遺跡で検出した遺構は竪穴住居２基、掘立柱建物５棟、溝３条、ピット多数、甕棺墓１基、石蓋土壙墓１基、古墳の石室１基である。

また、古墳の石室についてはその半分程度を調査し、調査区外は保存されるため、あえて調査区拡張による確認作業は行わなかった。調査面積は 554 ㎡である。

以下、遺構ごとに報告する。




第２図　調査区位置図（1/5,000）




第 3 図　調査区遺構配置図（1/200）

## （2）遺構と遺物（第４～24図、写真図版２～９）

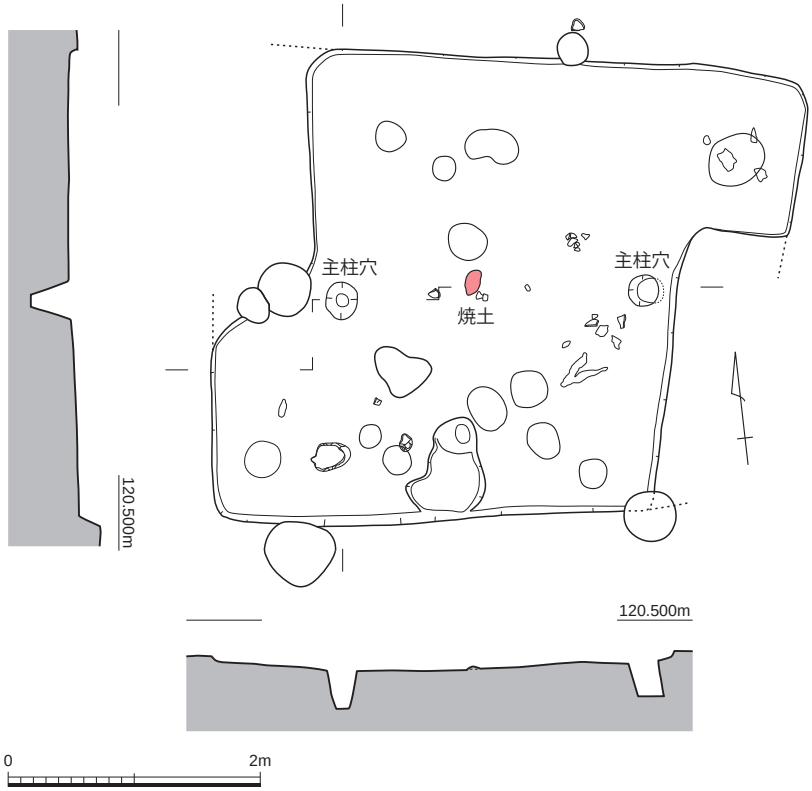
### 竪穴住居

**１号竪穴住居**（第４・５図、写真図版２・７）

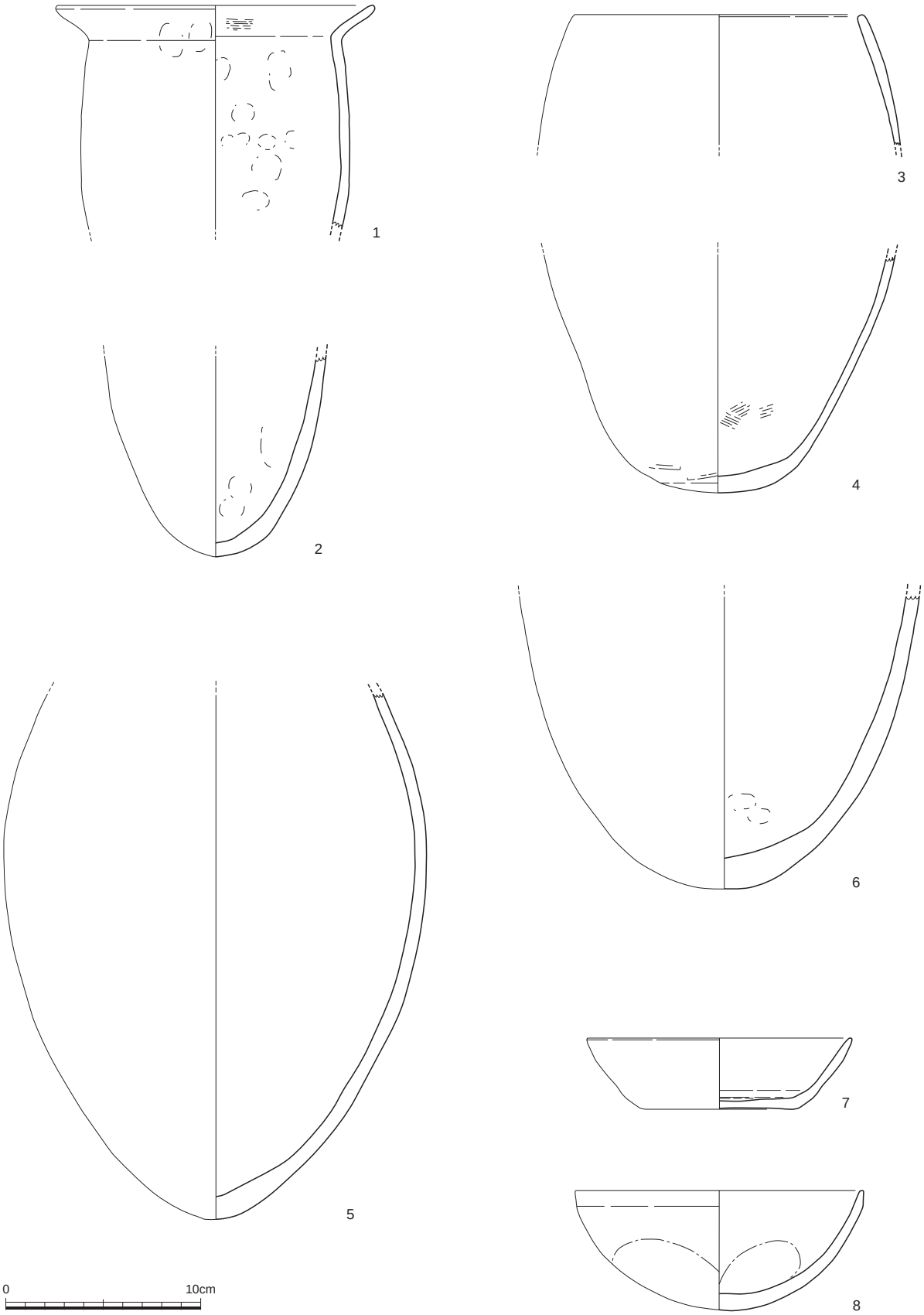
調査区の南側で検出した。この１号竪穴住居は遺構上面が大きく削平を受けており、壁面は残りの良いところでも15㎝程度しかなく、遺構検出段階から床面に近い場所から土器片が出土した。本来は北西隅と南東隅に2.3ｍ×0.8ｍほどのベッド状遺構を付設していた、東西4.72ｍ、南北3.78ｍと推定される長方形プランの竪穴住居である。

１号竪穴住居には２本柱（Ｐ１・2）の主柱穴が掘られており、主柱穴２本の中間には炉とみられる焼土の範囲が確認することができた。住居の床面直上には炭化材痕跡の広がりも認められた。竪穴住居の南面中央には不整形をした土坑を配置している。

遺物は床面直上から、甕、壷などが出土しており、主な遺物は第５図（1～8）に示した。1・2は小型の甕。3・4は無頸壷。5・6は壺の底部。いずれも住居床面からの出土。7・8は土師器の皿と坏で、流れ込みである。




第４図　１号竪穴住居実測図（1/60）




第５図　１号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

**２号Ａ・Ｂ竪穴住居**（第６・７図、写真図版２・７）

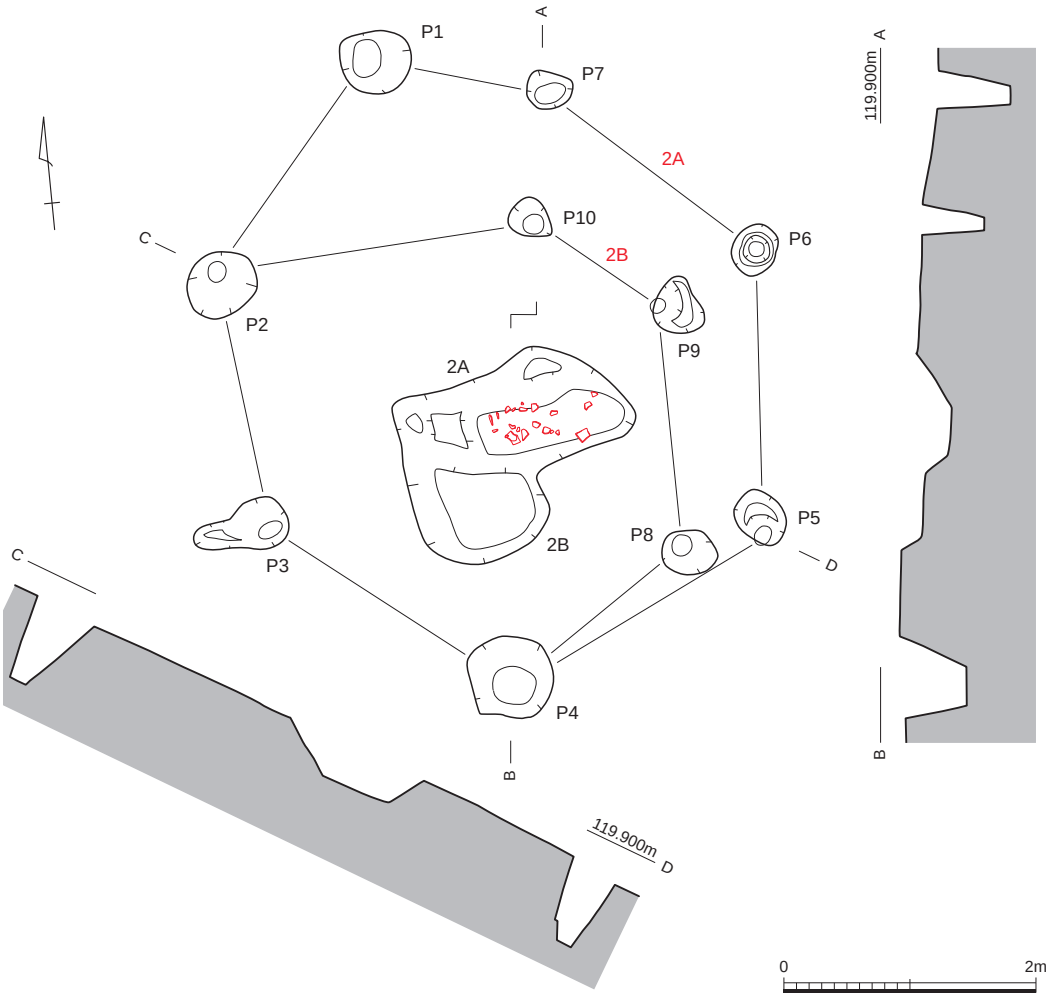
この竪穴住居は、調査区のほぼ中央で検出し、遺構上面が大きく削平を受けており、いずれも壁面は残っていなかった。２号Ａ竪穴住居は、第６図に示した埋土や深度がほぼ同一な柱穴７本（Ｐ１～７）が主柱穴と考えられる。これら主柱穴の中央には、炉跡とみられる１号土坑（第６図 2A）が存在することから、平面形が円形の竪穴住居であろう。その規模は、主柱穴の距離からして直径５ｍ以上と推定される。

遺物は、柱穴や土坑から土器片などが出土しており、主な遺物は第７図（1・2・4～8）に示した。1・2・4 は甕である。5～7 は高坏である。5 はＰ２、6 はＰ３の出土であるが同一固体と考えられる。8 は広口壷である。

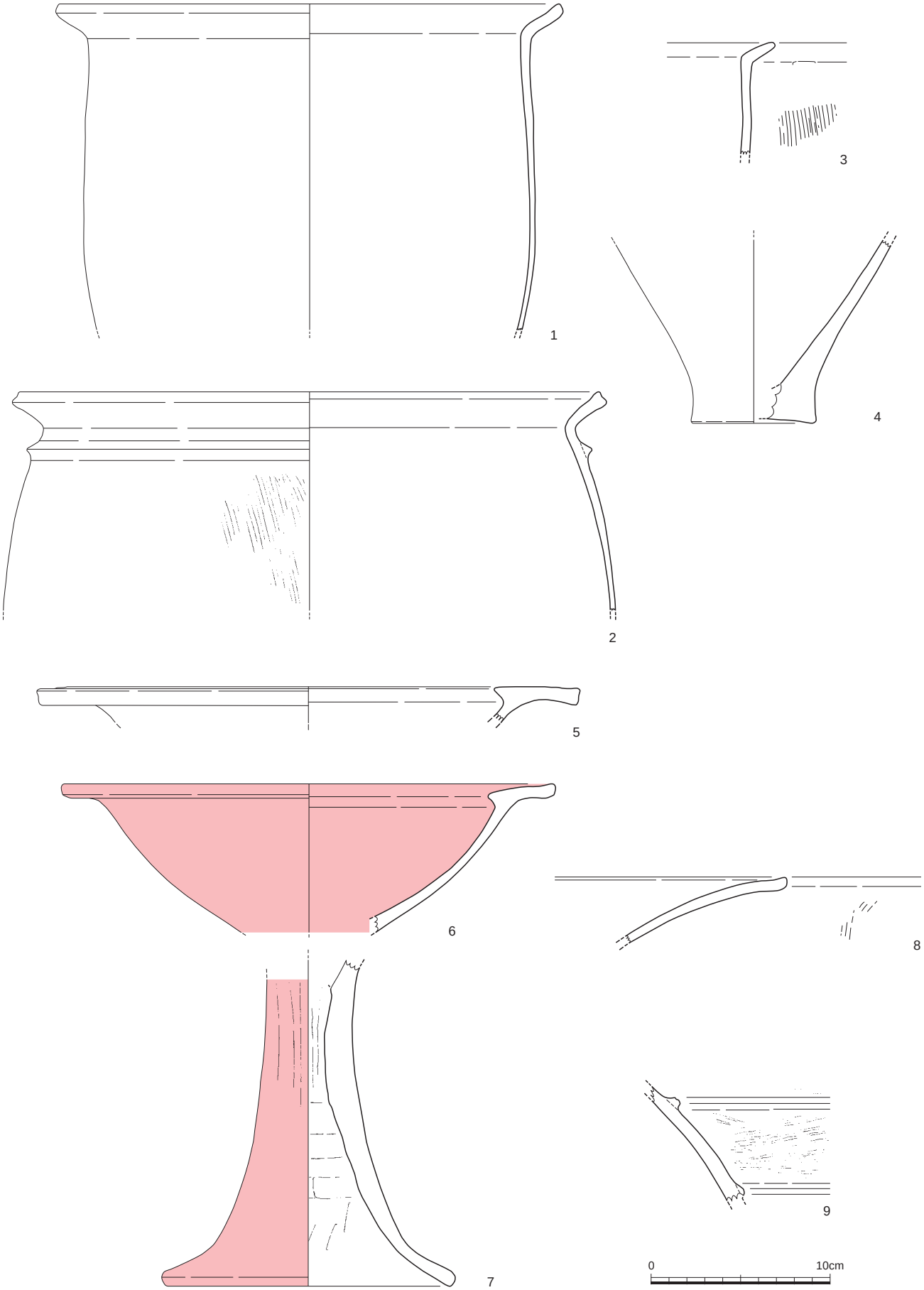
２号Ｂ竪穴住居は、第６図に示した埋土や深度がほぼ同一な柱穴６本（Ｐ２～４・８～10）が主柱穴と考えられ、これら主柱穴の中央には、炉跡とみられる２号土坑（第６図 2B）が存在することから、２号Ａ竪穴住居と同様に平面形が円形の竪穴住居であろう。その規模は、主柱穴の距離からして直径４ｍ以上と推定される。

このＡＢ２つの竪穴住居は、１号土坑が２号土坑を切っていることから、２号Ｂ竪穴住居→２号Ａ竪穴住居の新旧関係が想定され、その位置関係から建替えが行われた竪穴住居とみることができる。

遺物は、柱穴や土坑から弥生土器片などが出土しており、主な遺物は第７図（3・9）に示した。3 は甕である。９は壷の胴部である。いずれも土壙からの出土品。




第６図　２号Ａ・Ｂ竪穴住居実測図（1/60）



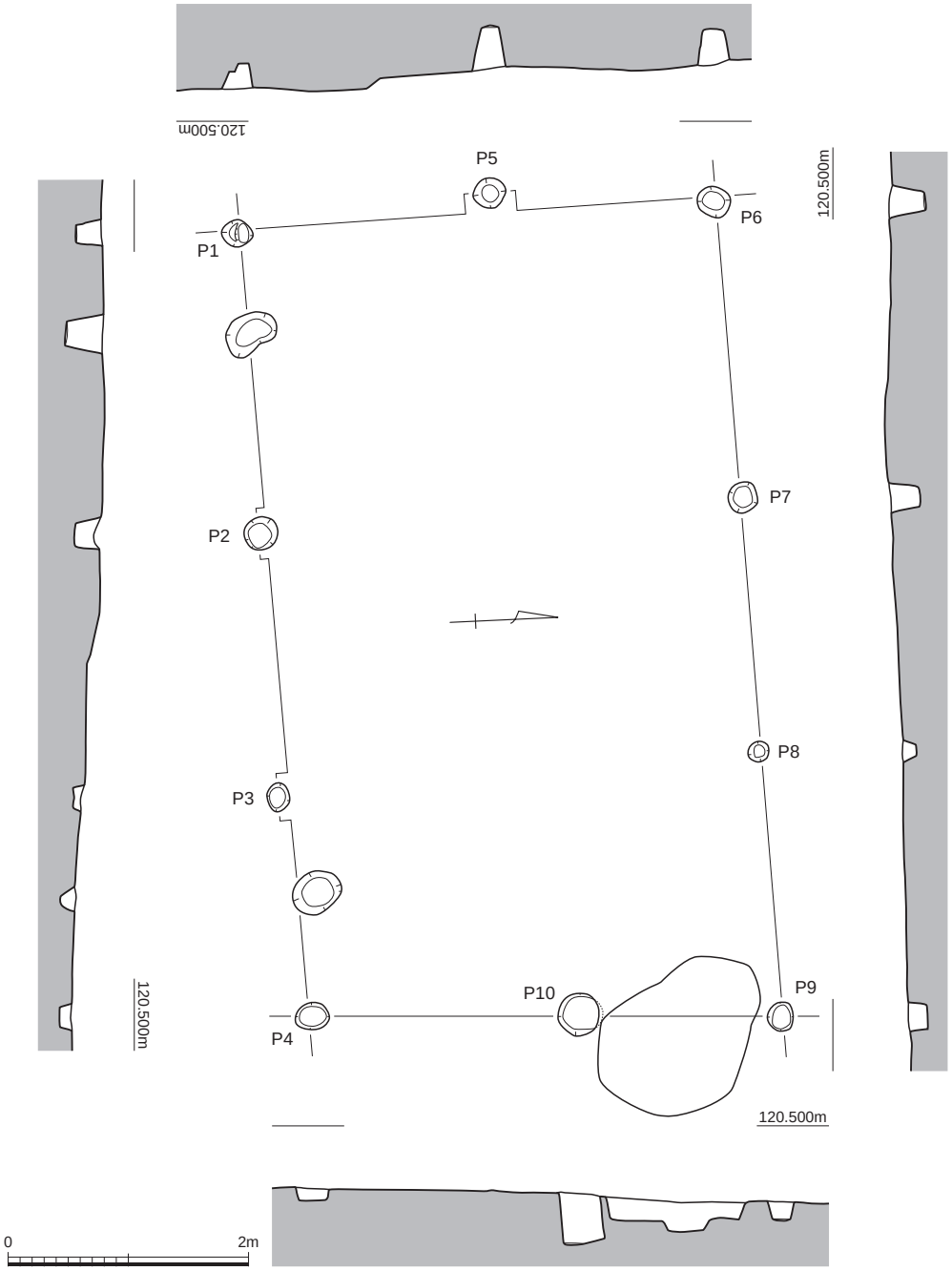

第７図　２号Ａ・Ｂ竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

## 掘立柱建物

### １号掘立柱建物（第８図、写真図版２）

調査区のほぼ中央で検出した。Ｐ１～10の柱穴で構成され、直径20～35㎝、深さ９～42㎝を測る。ほぼ東西方向に２間×３間の建物で、東西7.18～7.21ｍ、南北4.44～4.5ｍ、床面積約32㎡の規模である。

遺物は、柱穴から土師皿などの破片が出土している。

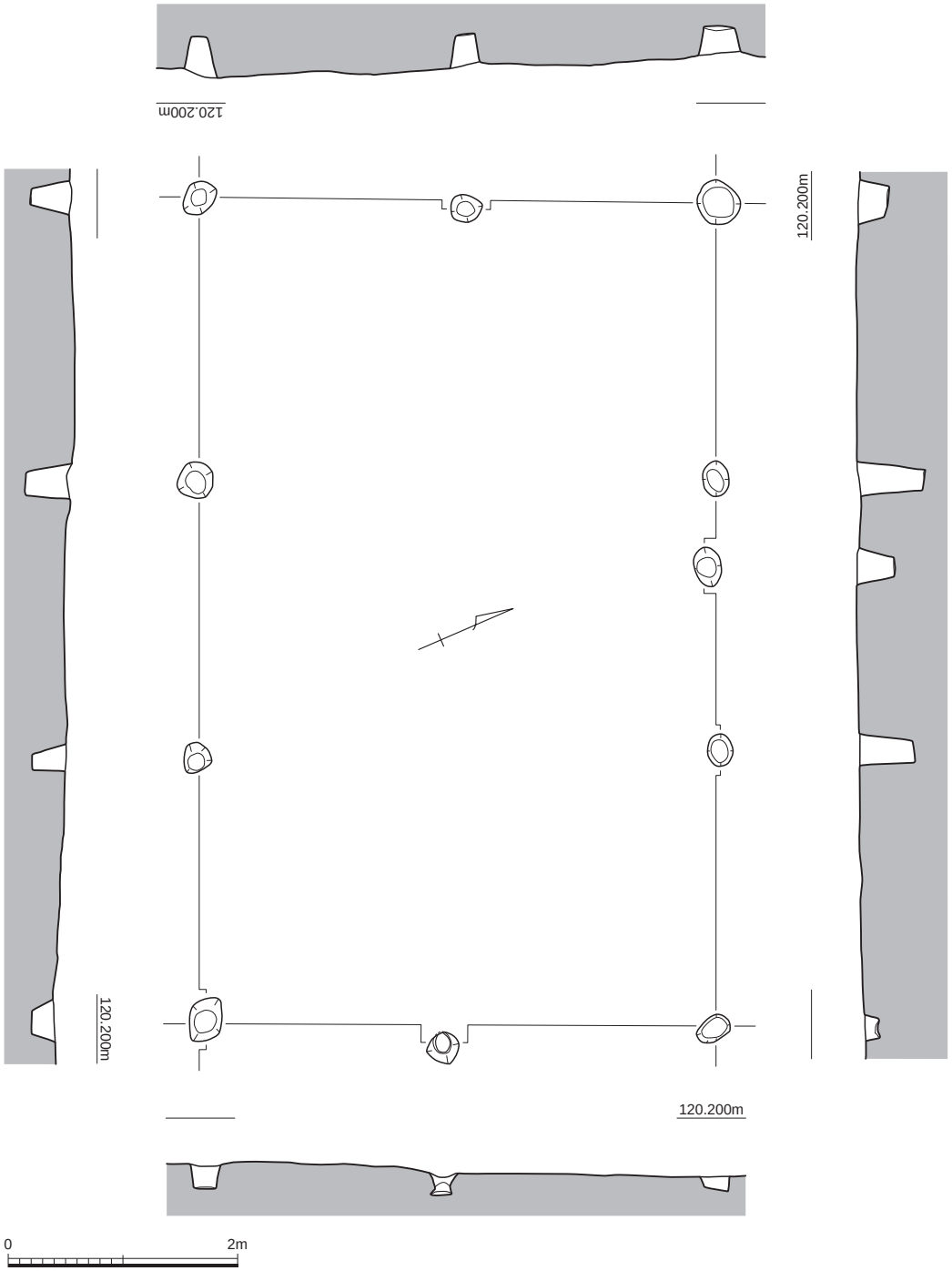



第８図　１号掘立柱建物実測図（1/60）

**2 号掘立柱建物**（第 9 図、写真図版 2）

1 号建物のすぐ北側で検出した。Ｐ 1 ～ 10 の柱穴で構成され、直径 20 ～ 40 ㎝、深さ 10 ～ 43 ㎝を測る。ほぼ東西方向に 2 間 ×3 間の建物で、東西 6.55 ～ 6.82 m、南北 3.9 ～ 3.92 m、床面積約 26 ㎡の規模である。1 号建物と東西方向の軸が並行しており、その規模も近似している。

遺物は、柱穴から土師皿などの破片が出土している。

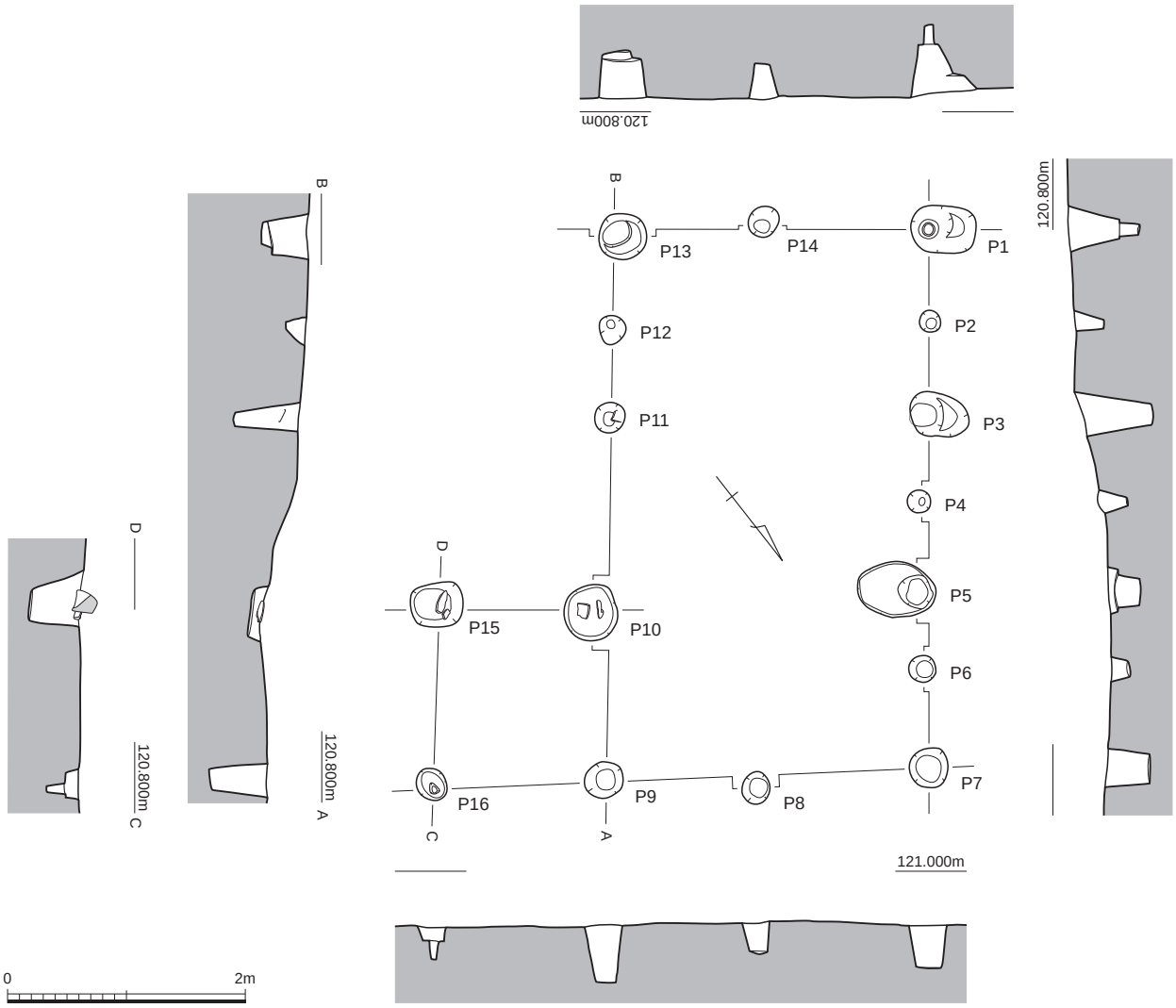



第 9 図　2 号掘立柱建物実測図（1/60）

**3 号掘立柱建物**（第 10 図、写真図版 2）

調査区の南側端で検出した。Ｐ１～ 16 の柱穴で構成されると推定され、ほぼ南北方向に 2 間 ×3 間の建物で、東側に 1 間分張り出す。桁の主柱穴間（Ｐ１・3・5・7、11・13）には、間柱（Ｐ２・4・6・12）が残る。主柱穴は、主柱穴が直径 24 ～ 48 ㎝、深さ 10 ～ 60 ㎝、間柱が直径 17 ～ 25 ㎝、深さ 15 ～ 24 ㎝を測る。東西 2.65 ～ 4.17 m、南北 4.52 ～ 4.62 m、床面積約 21 ㎡の規模である。

遺物は、柱穴から土師皿などの破片が出土している。

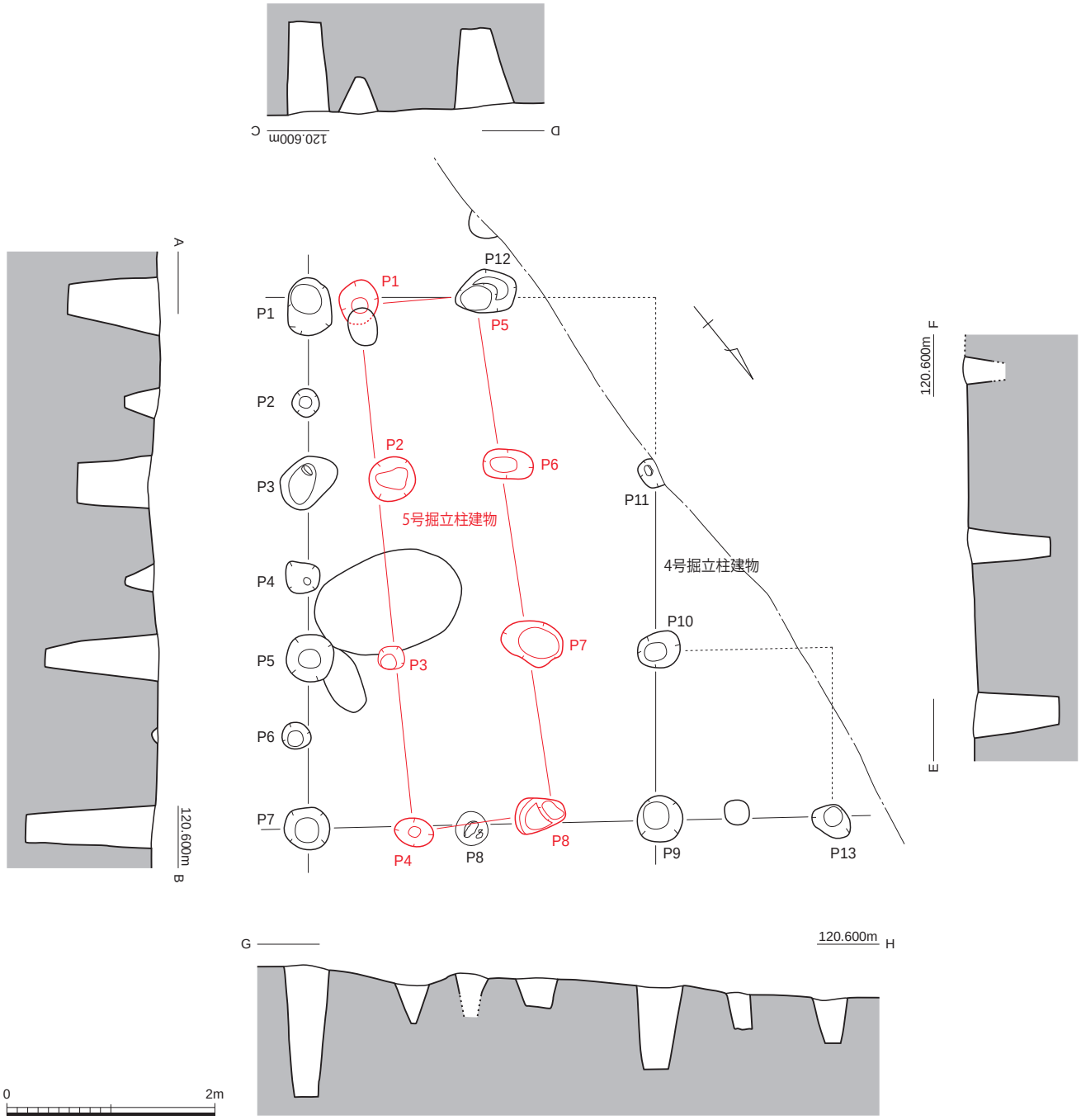



第 10 図　3 号掘立柱建物実測図（1/60）

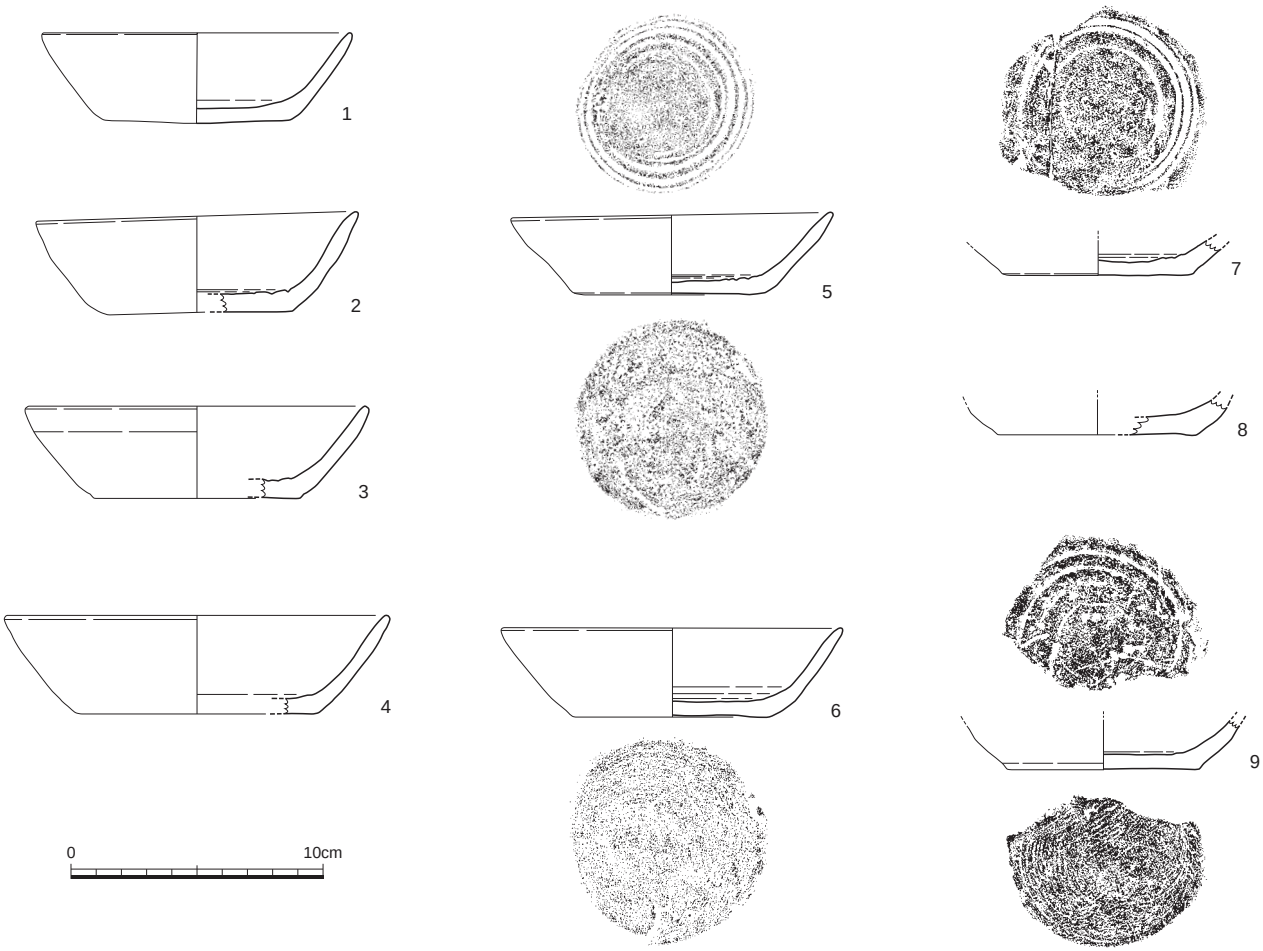
**4 号掘立柱建物**（第 11・12 図、写真図版 2・7・8）

3 号建物のすぐ西側で検出した。Ｐ 1 ～ 13 の柱穴で構成され、ほぼ南北方向に 2 間 ×3 間の建物で、西側に 1 間分張り出すとみられる。桁の主柱穴間（Ｐ 1・3・5・7）には、間柱（Ｐ 2・4・6）が残る。主柱穴が直径 30 ～ 48 ㎝、深さ 45 ～ 126 ㎝、間柱が直径 26 ～ 38 ㎝、深さ 25 ～ 30 ㎝を測る。東西 1.62 ～ 5.1 m、南北 1.59 ～ 5.12 m、床面積約 20 ㎡の規模である。3 号建物と主軸が並行し、その平面形や規模も類似する。

遺物は、柱穴から土師皿などが出土しており、主な遺物は第 12 図（1 ～ 9）に示した。いずれも坏で、内面調整横ナデが 2・3、5 ～ 9、外面調整横ナデが 2・3、6 ～ 9、底部調整糸切りが 1 ～ 3、5・6、8・9 である。これら遺物のうち、2 ～ 4、5 ～ 8 はＰ 5 からの一括出土である。




第 11 図　4 号掘立柱建物実測図（1/60）




第 12 図　4 号掘立柱建物出土遺物実測図（1/3）

**5 号掘立柱建物**（第 11 図）

3 号建物と重複するように検出した。4 号建物とは軸が異なることから、第 11 図のＰ 12・14 ～ 20 で構成される掘立柱建物と推定した。ほぼ南北方向に 1 間 ×3 間と考えられる建物で、柱穴の直径 22 ～ 60 ㎝、深さ 92 ～ 116 ㎝を測る。東西 1.12 ～ 1.35 m、南北 4.96 ～ 5.09 m、床面積約 6 ㎡の規模である。

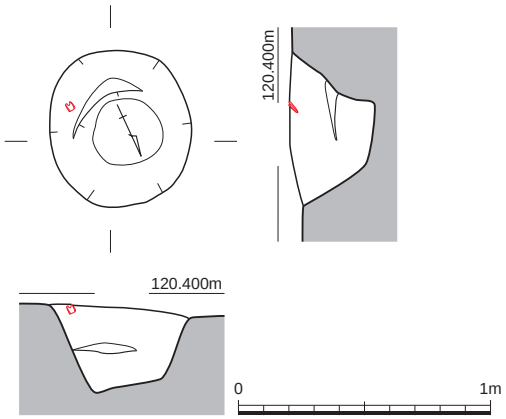
遺物は、Ｐ 18 から弥生土器の小片が出土している。

## 土坑

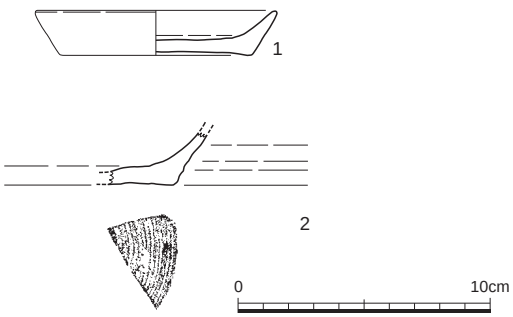
**1号土坑**（第13・14図、写真図版3・8）

調査区の北側で検出した。平面が円形をなす。掘立柱建物の主柱穴の可能性も考えられるが、対応する柱穴が認められないことから、土坑とした。直径0.6 m、深さ0.34 mを測る。

柱穴から土師皿などが出土しており、主な遺物は第14図（1～2）に示した。1は土師皿。2は坏である。このほか、上面から青銅製品が出土している。




第13図　1号土坑実測図（1/30）




第14図　1号土坑出土遺物実測図（1/3）

**2号土坑**（第15図）

調査区の北側で検出した。平面が楕円形をなす。1号土坑に切られる。長さ0.85 m＋α、幅0.79 m、深さ0.9 mを測る。遺物は土師器片が出土している。

**3号土坑**（第15図）

調査区の北側、1号竪穴住居のすぐ北で検出した。平面が楕円形をなす。2号建物に切られる。長さ1.44 m、幅0.94 m、深さ0.31 mを測る。遺物は出土していない。

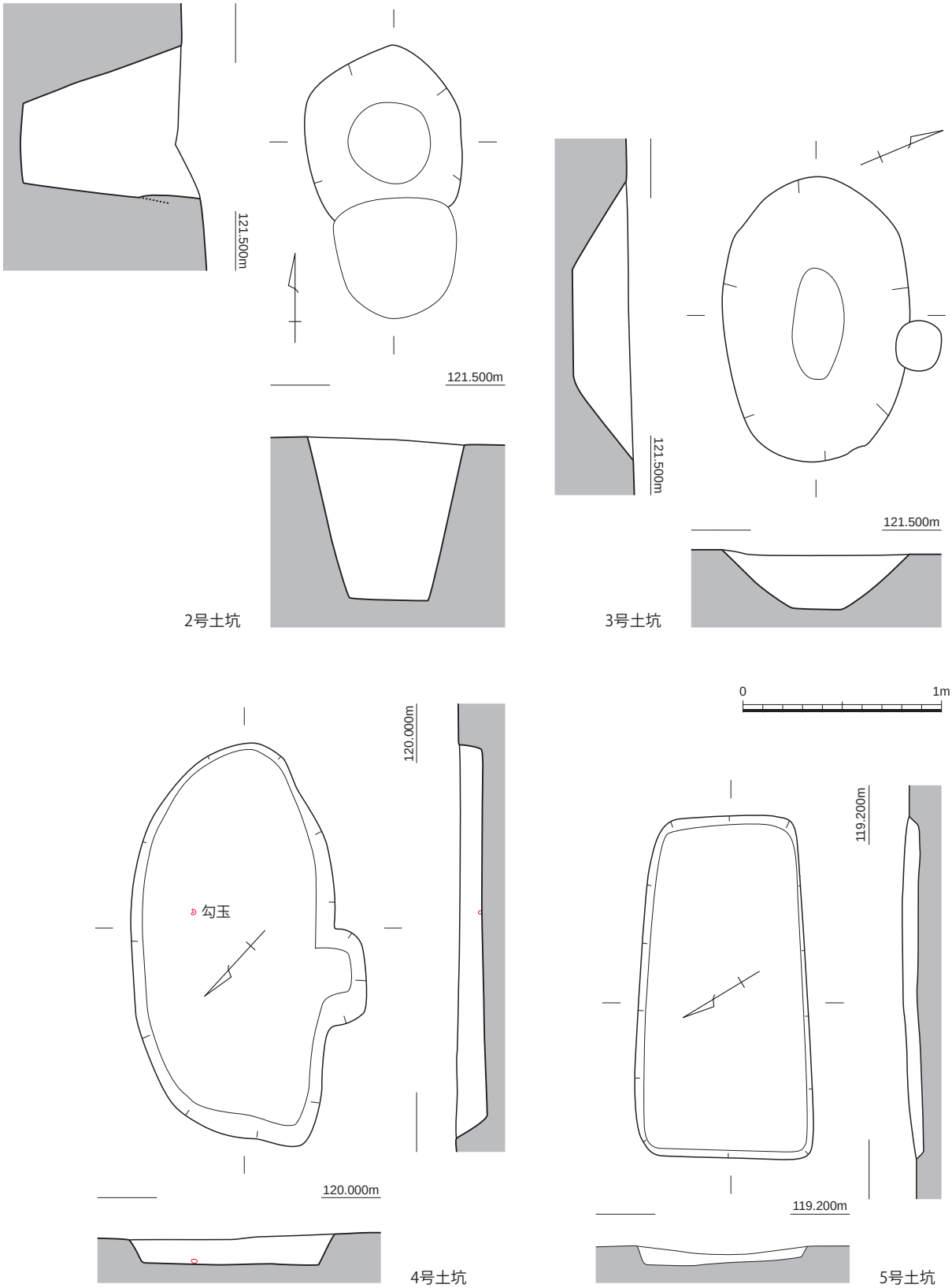
**4号土坑**（第15図、写真図版3）

調査区のほぼ中央、2号竪穴住居のすぐ南側で検出した。平面が楕円形をなす。長さ1 m、幅0.51 m、深さ0.15 mを測る。床面直上から、扁平な硬玉製勾玉が出土しており、土壙墓の可能性もある。

遺物は硬玉製勾玉以外には出土しておらず、硬玉製勾玉は整理段階で紛失している。

**5号土坑**（第15図）

調査区の北側で検出した。平面が長方形をなす。長さ1.69 m、幅0.9 m、深さ0.09 mを測る。土壙墓の可能性もある。遺物は出土していない。



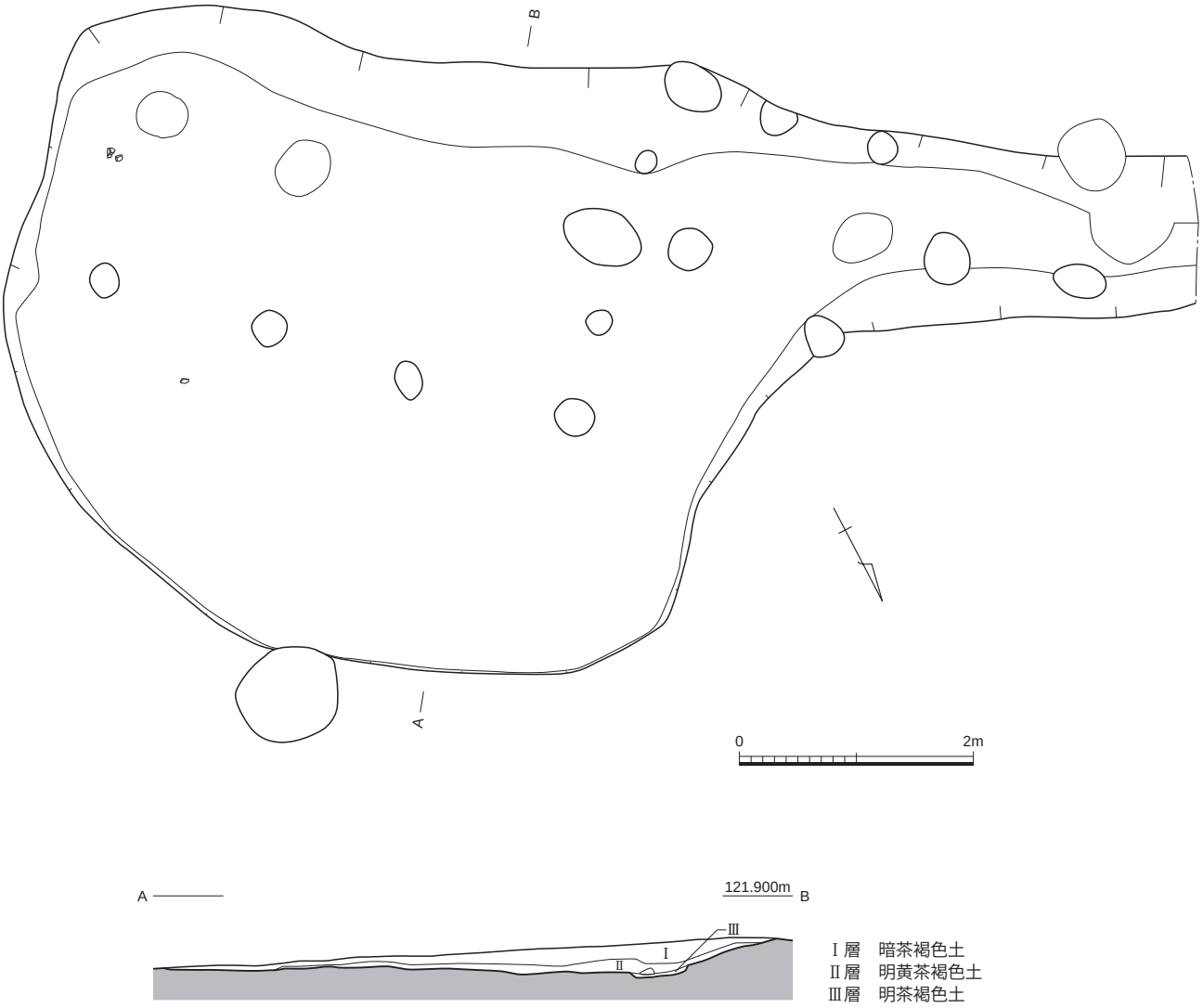

第 15 図　2 ～ 5 号土坑実測図（1/30）

## 溝

**1号溝**（第16・19図、写真図版3・8）

調査区の南側で検出した。東西方向に伸びる溝で、西側の幅は狭く、東側は楕円形を呈する。長さ10.08 m、幅は1.37 ～ 5.36 m、深さ0.25 mを測る。全体的に浅い溝で、断面は皿状をなす。埋土は2層からなり、いずれもしまりがみられ、焼土や炭化物を含んでいる。3・4号建物を切る。

遺物は、溝中から土師皿などが出土しており、主な遺物は第19図（1 ～ 2）に示した。1は土師皿、2は青磁碗である。

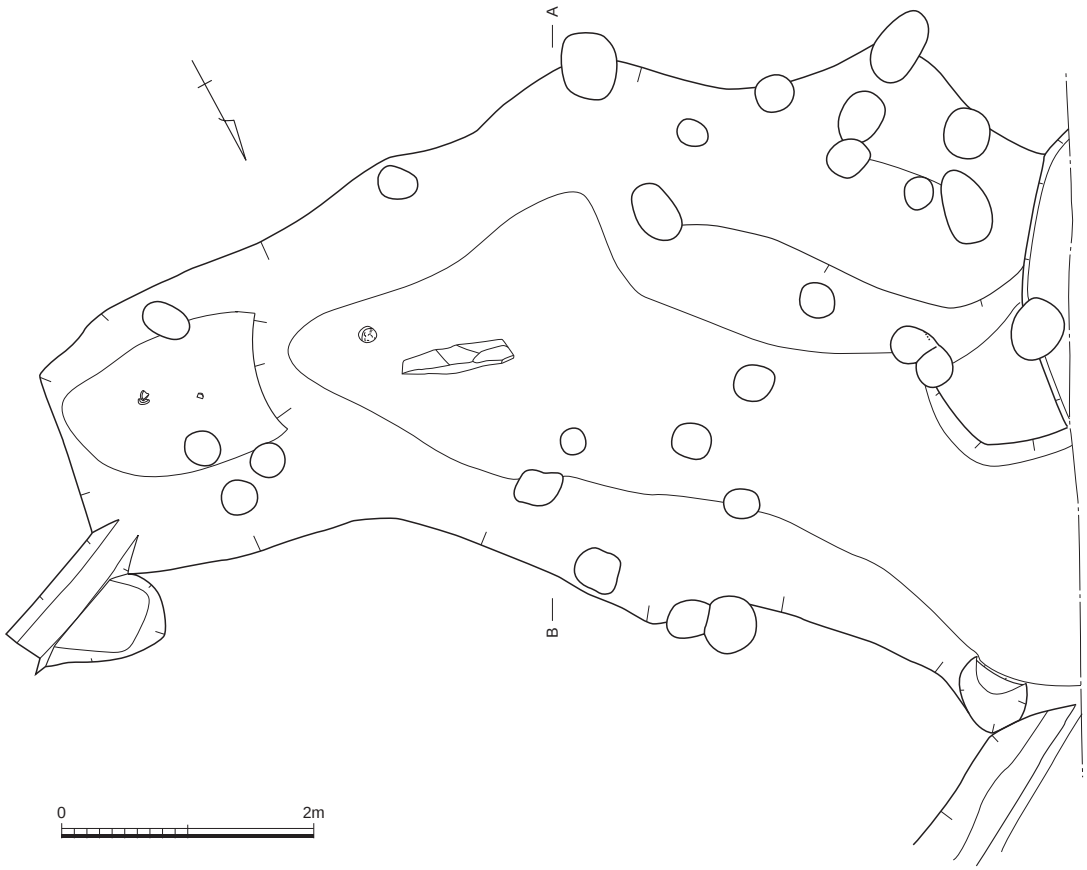


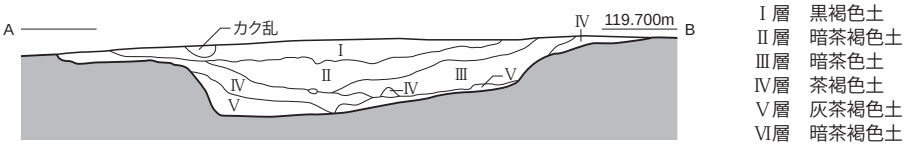

第16図　1号溝実測図（1/60）

**2号溝**（第17・19図、写真図版3・8・9）

調査区の中央やや北側で検出した。東西方向に伸びる溝で、溝幅は西側が広く、東に行くほど狭くなり途切れる。長さ8.06ｍ、幅は2.1～4.56ｍ、深さ0.58ｍを測る。1号溝に比べると深く、断面はＵ字形をなす。埋土は6層からなり、南北方向からの流れ込みが観察された。2号Ａ竪穴住居を切る。

遺物は、溝中から弥生土器片や須恵器片、土師皿片、角礫などが出土している。第19図（3～10）の3・4は弥生土器の甕。5は弥生土器の壺。6･7は須恵器の坏蓋･坏身。8は土師器の坏身。9は須恵器坏身。10は土師器の椀で、いずれも流れ込み遺物である。



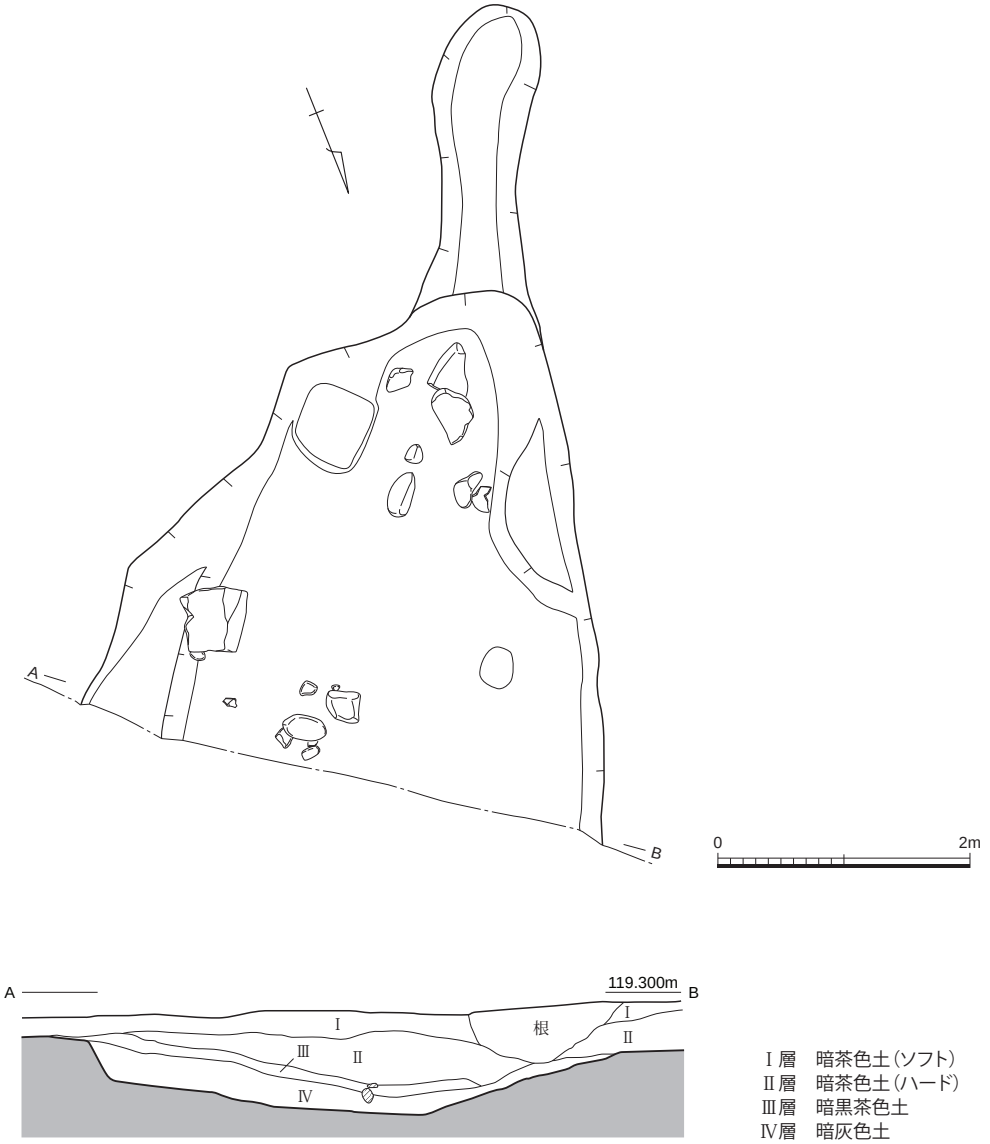




第17図　2号溝実測図（1/60）

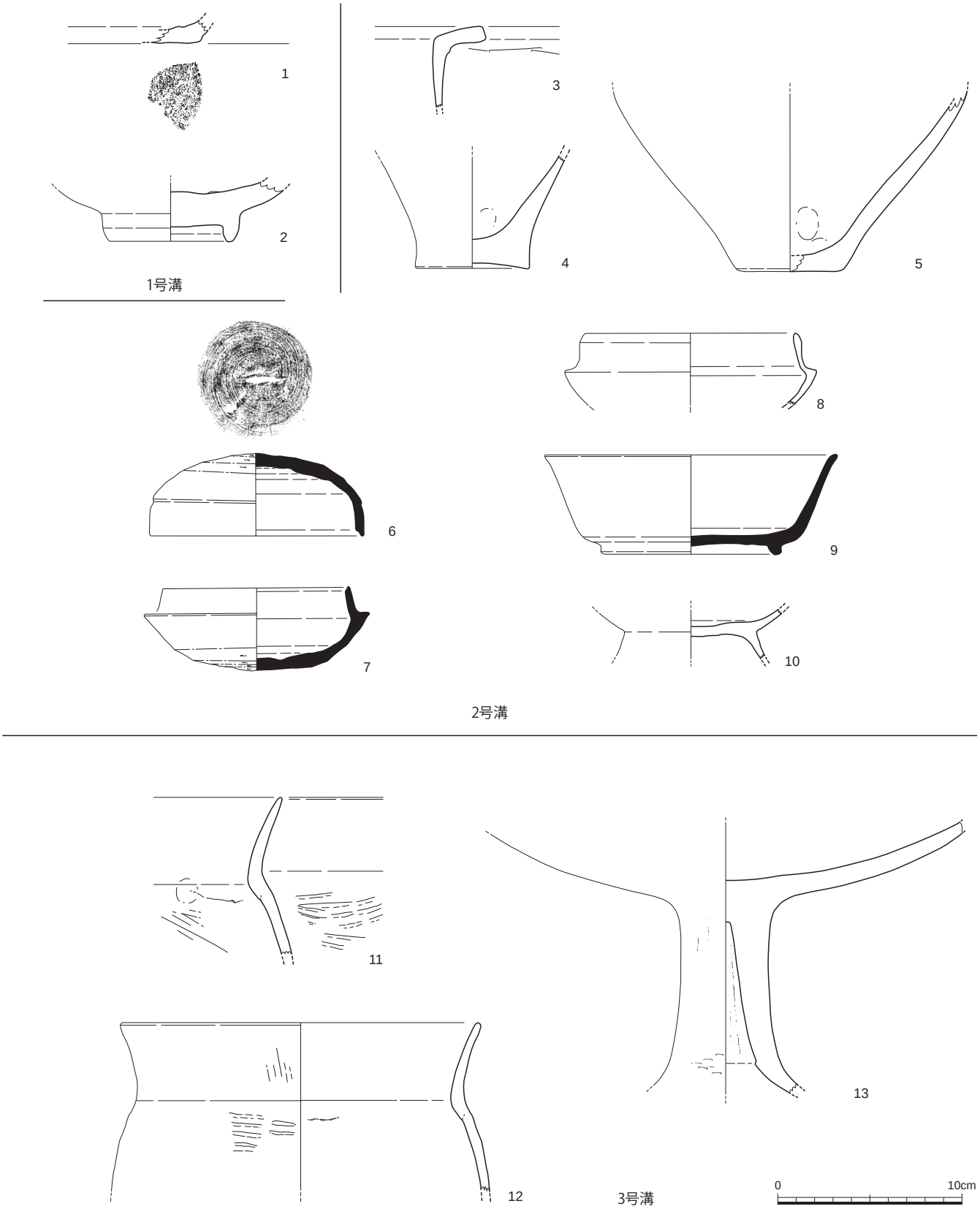
**3 号溝**（第 18・19 図、写真図版 3・9）

調査区の北側端で検出した。南北方向に伸びる溝で、溝幅は北側が広く、南に行くほど狭くなり途切れる。長さ 6.22 m、幅は 0.6 ～ 4.26 m、深さ 0.66 mを測る。断面は浅いU字形をなす。埋土は 3 層からなり、比較的しまった堆積土である。位置関係などから、2 号溝に関係するものと考えられる。

遺物は、溝中から弥生土器片のほか、2 号溝同様に円礫や角礫が認められた。第 19 図（11 ～ 13）の 11・12 は土師器の甕。13 は弥生土器の高坏で、いずれも流れ込み遺物である。




第 18 図　3 号溝実測図（1/60）



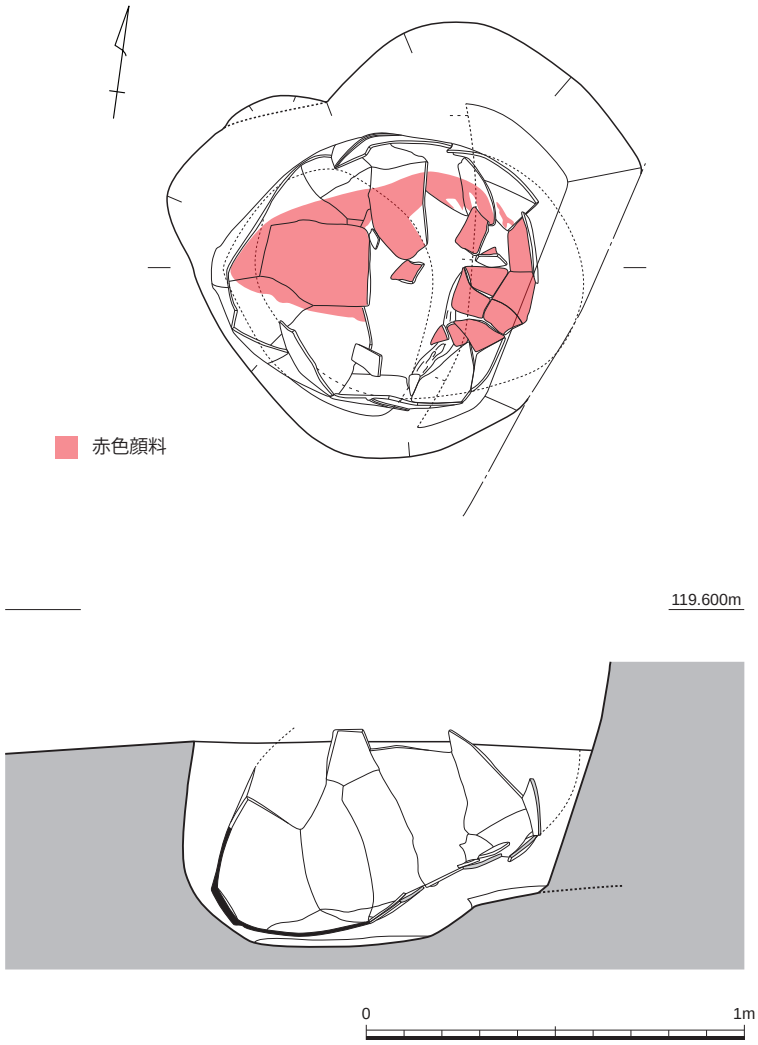

第 19 図　1 ～ 3 号溝出土遺物実測図（1/3）

## 墓

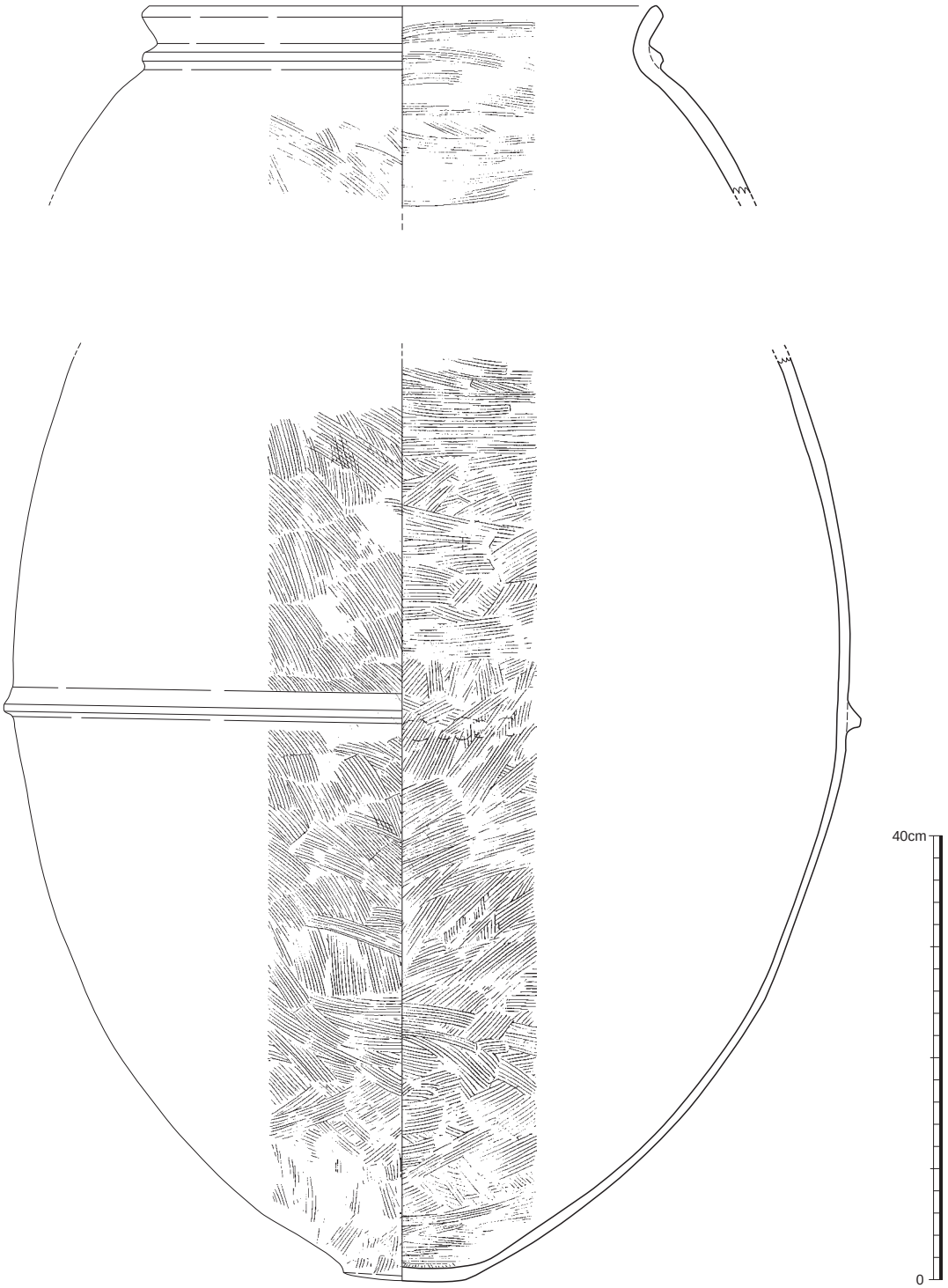
**1号甕棺墓**（第20・21図、写真図版4・9）

この墓は調査区東側で検出した甕棺墓で、上部は削平を受けている。墓壙は長軸が2.45 m＋ α、短軸が2.23 m、深さが1.09 mを測る。棺内に異なる棺片や板石が認められなかったので、単棺と考えられる。棺内には頭骨や大腿骨などが残っており、棺内側には赤色顔料が塗布されていた。副葬品は認められなかった。甕棺墓の主軸はW -3- Nで、埋葬角度は30度である。

甕棺（第22図）は口縁部が短く、「く」状に外反し、口縁部下に一条の「コ」字状の突帯を巡らせている。胴部は卵形をなし、胴部最大長部に一条の「コ」字状の突帯を巡らす。底部は丸みを持つ不安定な底をなしている。内外面ともにハケ目調整が施されている。器高は85 cm＋ α、復元口径45.6 cm、胴部最大幅75.2 cm、底径11 cmを測る。




第20図　1号甕棺墓実測図（1/20）

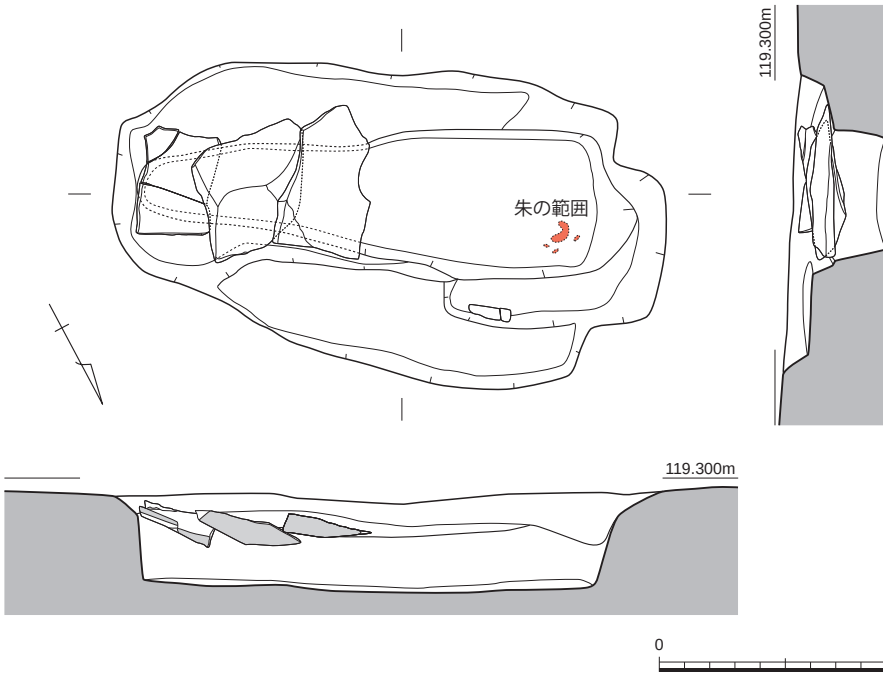



第 21 図　1 号甕棺実測図（1/6）

**1 号石蓋土坑墓**（第 22 図、写真図版 4）

調査区の北側、1 号甕棺墓の東側で検出した。この墓は二段掘りの石蓋土坑墓で、足位側に安山岩製の扁平な板石を甲重ねとした 3 枚の石蓋のみが残っていた。床面の頭位部には、赤色顔料の一部が残存していた。土壙上部は撹乱が著しく、人骨は残っておらず、副葬品も認められなかった。

墓壙は長軸が 2.2 m、短軸が 1.24 m、深さが 0.15 m、土壙は長軸が 1.99 m、短軸が 0.6 m、深さが 0.27 mを測る。本石蓋土壙墓の主軸はＳ -29- Ｎを測る。




第 22 図　1 号石蓋土壙墓実測図（1/30）

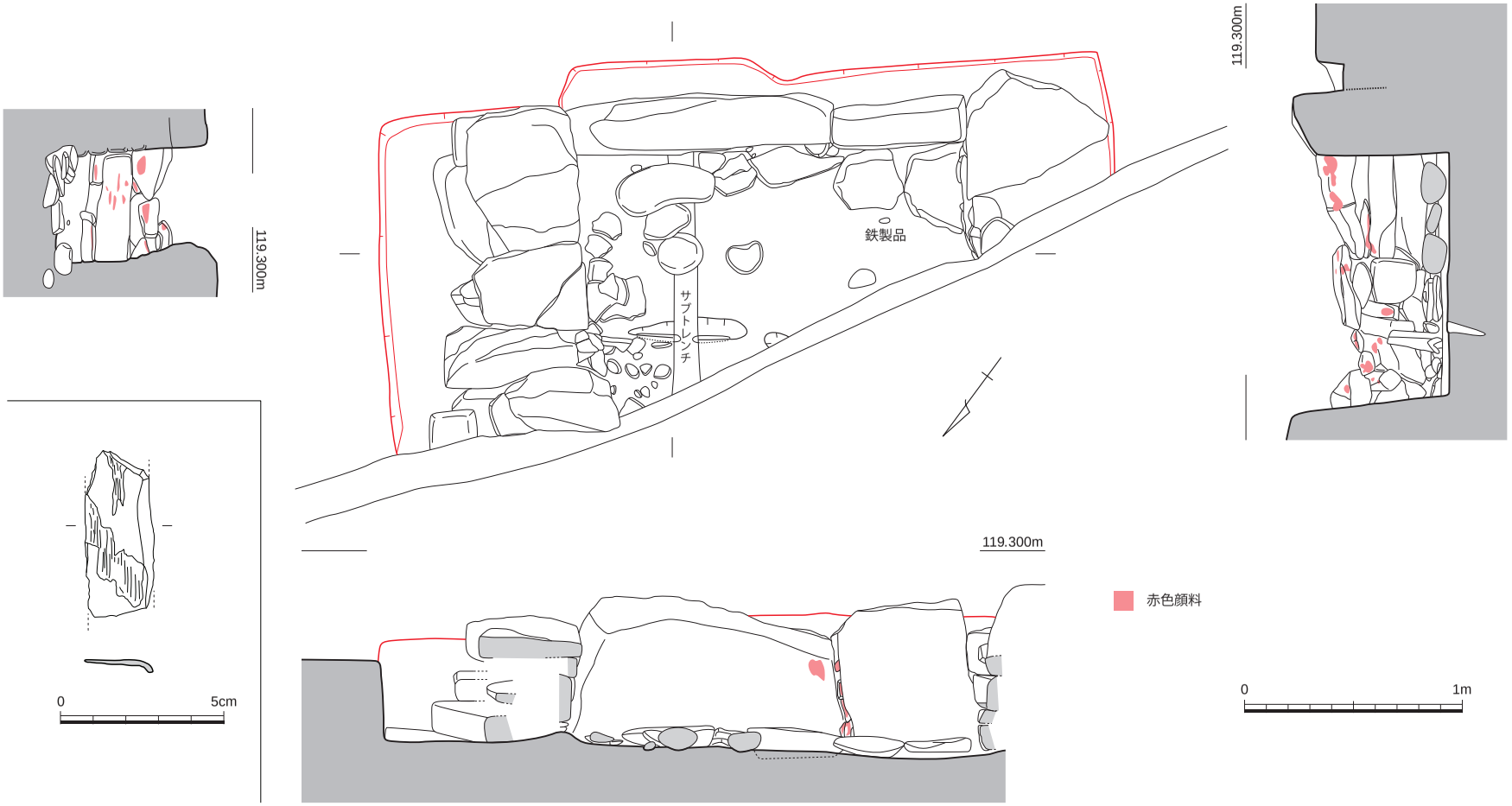
**1 号石室**（第 23 図、写真図版 5・6・9）

調査区南側の西隅で検出した。石室上部は削平を受けており、その状況から第 23 図の上が奥壁にあたり、高さ約 1 m、幅約 1.3 mと、高さ約 1 m、幅約 0.7 mの大小 2 つの石を並べている。両側壁は、腰石は石を立てることなく、2 ～ 3 枚の石を積み重ねて、その上部を割石積みとしている。

この奥壁と両側壁には赤色顔料の塗布が認められる。その範囲は、肉眼観察では部分的であるが、奥壁と両側壁ともに残っていることからすれば、本来は全面に塗布されていたと考えられる。奥壁から西に約 80 ㎝の場所に高さ約 30 ㎝の扁平石一枚が立っており、また抜き取り痕跡も認められることから、屍床との仕切が存在していたと考えられる。この床面の屍床部には頭大ほどの敷石、屍床部西側には僅かであるが小礫がみられ、仕切を境に奥壁側には敷石、反対側には小礫が配置されていたと推定される。

この石室に伴う周溝については、確認することができなかった。本石室の規模は奥壁面側の長さが 1.85 m、直行する側の長さが 1.10 m＋ α で、石室の掘り方は奥壁面側の長さが 3.41 m、直行する側の長さが 1.54 m＋ α である。

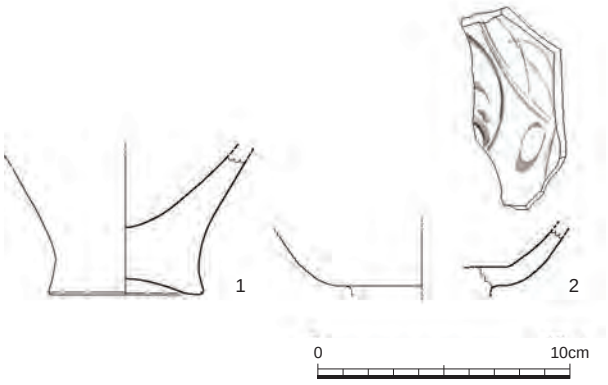
副葬品については、石室内床面から第 23 図に図示した鉄製品 1 点が出土した。腐食が著しく、表面に木質の一部が残っている。器種は不明。石室内の埋土は全て現地でフルイ作業を行ったが、弥生土器片や陶磁器片などが確認できたが、土器や玉類など副葬品と思われる遺物は認められなかった。




第 23 図　1 号石室実測図（1/30）・1 号石室出土鉄器実測図（1/2）

**一括遺物**（第 24 図、写真図版 9）

今回の調査地点内での一括遺物を第 24 図（1・2）に示した。1 は弥生土器の甕の上底をなす底部である。2 は青磁碗で、内面に草花文の片彫が認められる。




第 24 図　一括遺物実測図（1/3）

# Ⅵ　甕棺出土人骨について

舟橋京子＊・田中良之＊＊
＊九州大学総合研究博物館
＊＊九州大学大学院比較社会文化研究院

## １．はじめに

大分県日田市平島遺跡Ｅ区において検出された甕棺から人骨が出土し、調査を担当した日田市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に調査依頼があった。そこで、同講座の金宰賢（現東亜大学校）・田中良之が現地におもむき人骨の調査および取り上げを行った。その後人骨は九州大学へと搬入され、本講座において整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化学府古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

## ２．出土状態

人骨は甕棺の胴部付近から頭蓋骨が出土し、底部付近から大腿骨が出土している。大腿骨付近からは上顎骨も出土している。頭蓋骨と大腿骨のほぼ中間から下顎骨および寛骨片が遺存している。以上の出土状況から本人骨は口縁側に頭を向けた屈葬の状態で埋葬されていたが、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が甕棺胴部付近まで落下し、上顎骨も甕棺底部付近に落下したと推定される。

## ３．人骨所見

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くなく細片化しており、細かい部位同定や観察が困難である。頭蓋骨は左右上顎骨の梨状孔付近片およびラムダ縫合を含む右頭頂骨片が遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ● | ● | | ● | ● | ● | | | | ● | ● | ● | ● | ● | |
| ／ | $M^2$ | $M^1$ | ／ | $P^1$ | C | $I^2$ | ／ | ／ | ／ | C | $P^1$ | $P^2$ | $M^1$ | $M^2$ | ／ |
| ／ | $M_2$ | $M_1$ | $P_2$ | ／ | ／ | $I_2$ | ／ | ／ | ／ | ／ | $P_1$ | ／ | ／ | ／ | ／ |
| | ● | ● | ● | | | ● | | | ● | | ● | | | | |

（ ○歯槽開放　× 歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ　●遊離歯　（ ）未萌出　ｃ齲歯）

この他にも左右同定困難な上顎第３大臼歯が遺存している。歯牙咬耗度は栃原の 1°　ｃ～ 2°　ａである（栃原 1957）。

下肢骨は左右不明寛骨片および大腿骨片・脛骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度から成年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

## ４．まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態があまり良くなく、計測に耐えうる人骨はなく形質的比較を行える個体は得られなかった。

最後に本報告にあたり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜った。深謝したい。

参考文献

栃原　博，1957：日本人歯牙咬耗度に関する研究．熊本医学会雑誌，31-4.

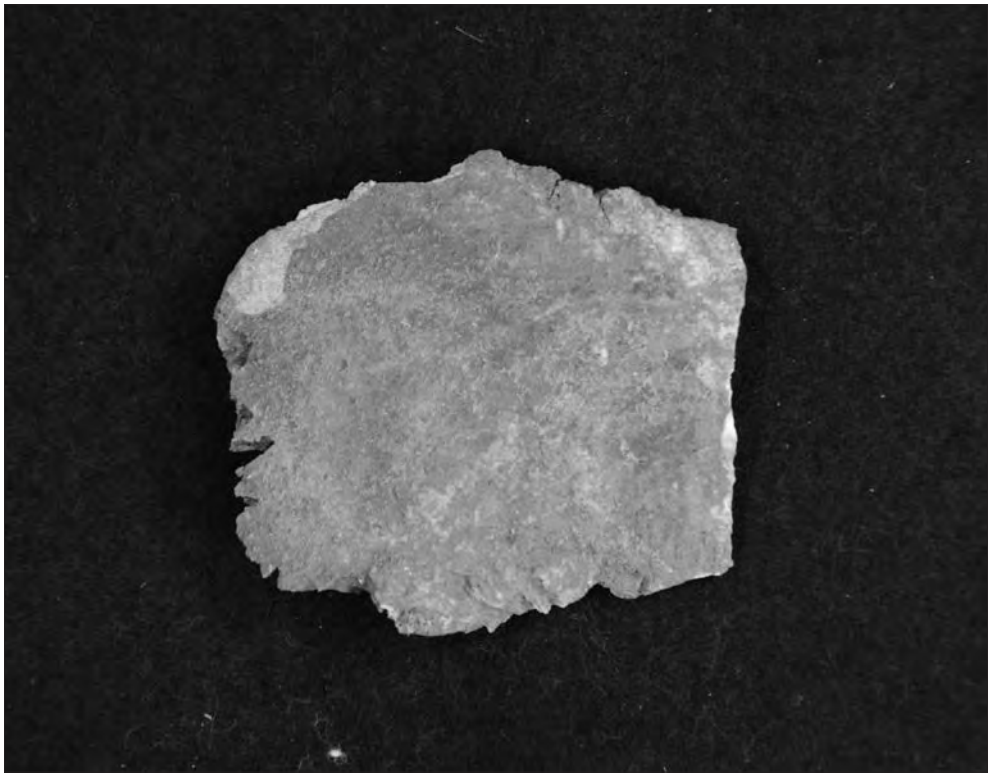


図１　平島遺跡甕棺出土人骨右側頭骨

図２　平島遺跡甕棺出土人骨歯牙

# Ⅴ　総括

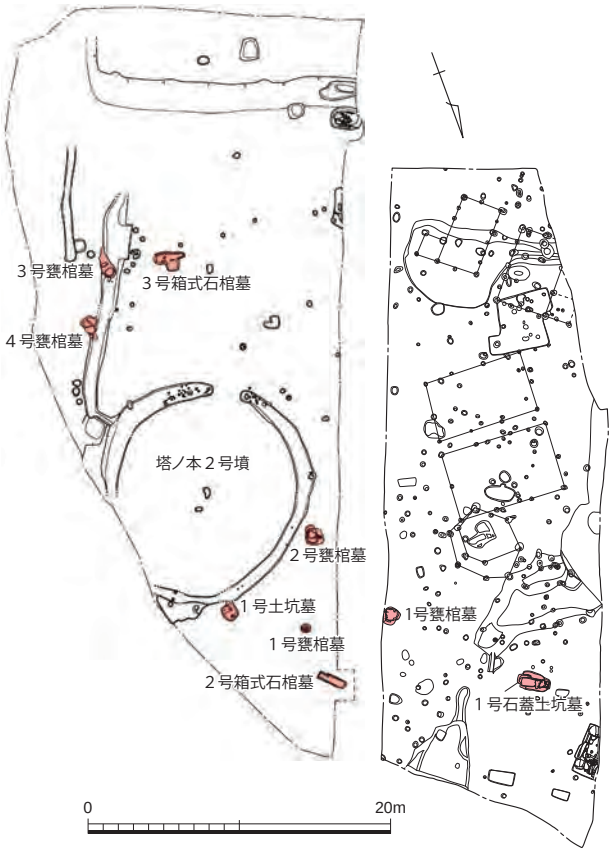
本調査の成果を、以下にまとめる。

**弥生時代の遺構**

この時期の遺構には２号Ａ・Ｂ竪穴住居、１号甕棺墓、１号石蓋土壙墓が相当する。

これらのうち、２号Ａ・Ｂ竪穴住居からは土坑や主柱穴から跳ね上げ口縁を有する甕（第７図１・2）や鋤先口縁を有する朱塗の高坏（第７図５～７）などの土器が出土しており、須玖式期に該当し、中期後半代に比定できる。調査区内での当該期の遺構はこの竪穴住居だけであるが、１～３号溝からも竪穴住居と同時期の土器片が出土していることから、Ｅ地点周辺には須玖式期の集落遺構が広がっているものと予想される。平島遺跡Ｅ地点背後の祇園原遺跡１次調査では中期末から後期前半代の集落跡が確認されており【註1】、この遺跡では中期の円形から後期の方形化へといった竪穴住居形態の流れや、集落内に大型建物や棟持柱建物を配置するなどの特徴を持つなど、年代の近い立地場所の異なる両遺跡の関係が注目される。

次に、１号甕棺墓と１号石蓋土壙墓であるが、１号甕棺墓は短く立ち上がる口縁部と卵形胴部中央に突帯を巡らせ、不安定な底部をなしている。こうした特徴は、隣接する平島遺跡Ｄ地点３号甕棺墓【註2】や草場第二遺跡Ⅲ類（70号）【註3】に類似しており、後期後半から古墳時代初め頃の時期幅の中で収まるものと考えられる。１号石蓋土壙墓については遺物が出土していないため時期は特定できないが、第25図に示した今回のＥ地点と隣接するＤ地点【註4】の調査区での墳墓の分布状況からすれば、１号甕棺墓と同時期とみることができそうである。今回のＥ地点と隣接するＤ地点の墳墓の遺構の在り方については、塔ノ本２号墳を挟んで北のＡ群と南のＢ群に分けられる。Ａ群は甕棺墓３基、石蓋土壙墓２基、箱式石棺墓１基で構成される。Ｂ群は甕棺墓、石蓋土壙墓、箱式石棺墓がいずれも各１基ずつである。両群ともに墳墓の構成内容は同様のあり方をなしているが、Ａ群のＤ地点２号甕棺墓とＢ群のＤ地点３号甕棺墓にはいずれもガラス小玉が副葬されている点においては、副葬品を持たない石蓋土壙墓、箱式石棺墓などとの違い認めることができる。




第25図　平島遺跡Ｃ・Ｄ地点の遺構配置図（1/500）

### 古墳時代の遺構

この時期の遺構には、1号竪穴住居、1号石室が該当する。

まず1号竪穴住居は、床面直上から丸底の甕（第5図1・2）が出土していることから、古墳時代の初め頃に位置づけられよう。遺跡内の3号溝からは外面にタタキが残る甕（第19図11）が出土しており、弥生時代中期の須玖式期の集落遺構と同様に、遺跡周辺には弥生時代終末から古墳時代の初め頃の集落遺構が存在する可能性が高いと考えられる。また、D地点のすぐ眼下の沖積地に位置する平島遺跡A・B地点（第1図3-1・2）では弥生時代後期後半から終末期の環濠集落が発掘されており、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての平島遺跡集落の在り方は興味深いところである。

1号石室については、近接する塔ノ本古墳（以下、塔ノ本1号墳（第1図5））や平島遺跡D地点の報告【註5】において、「塔ノ本3号墳」（以下、1号石室を塔ノ本3号墳と記す）と呼んでいた古墳である。この塔ノ本3号墳の時期については、年代の決め手となる土器などが出土していないため詳細は不明であるが、近接して存在する6世紀前半とされる塔ノ本2号墳と比較した場合には、奥壁は複数の鏡石を用い、壁面には赤色顔料を塗布し、床面を扁平石による屍床と円礫によって内部空間を区分けするなどの類似点が見出せる。塔ノ本3号墳の石室の全体象ははっきりしないが、奥壁幅だけをみると、両古墳ともに2m弱の長さがあり石室規模も似通っているものと思われる。ただ側壁については、塔ノ本2号墳では腰石を用いてその上に割石による持ち送りとしているが、塔ノ本3号墳では腰石を用いないまま基部から割石による持ち送りとしているようである。後者のこうした事例としては、市内では6世紀初め頃とされる法恩寺山4号墳【註6】に類例をみることができる。この法恩寺山4号墳の石室は、奥行き約2.6m、幅約2mの平面長方形プランの単室構造で、この古墳に後出する6世紀後半代の装飾壁画として知られている3号墳は筑後地方の影響を受けた平面胴張りプラン構造をなしている。こうしてみてみると、塔ノ本3号墳は、塔ノ本2号墳や法恩寺山4号墳の石室に類似することから、ここでは6世紀前半代と推定し、詳細は今後の調査事例を待ちたい。

### 中世の遺構

この時期の遺構には、1～5号掘立柱建物、1号土坑、1～3号溝がある。

4号掘立柱建物は、柱穴P5に一括廃棄された土師器坏（第12図2～8）が出土している。口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（3・4）と、外に開き気味のもの（2・5・6）が見受けられる。法量がはっきりする坏は、口径が12.6～13.4㎝、低径が7.4～7.6㎝、器高3.2～3.9㎝を測り、平均口径は12.9㎝、平均低径が7.6㎝で、低径の比率は59%である。他に良好な遺物が認められないため時期比定は難しいが、すでに提示されている編年観に照らせば、渡邊氏【註7】のⅣ期（15世紀中頃～15世紀後半）、坂本氏【註8】の15世紀前葉～15世紀後葉に相当するものである。この4号掘立柱建物は1号溝に切られており、1号溝からは15世紀頃の青磁碗（第19図2）が出土していることからすれば、4号掘立柱建物は同一軸の3号掘立柱建物ともに15世紀前半から中頃、1号溝は15世紀後半から16世紀中頃に比定されよう。

また、1・2・5号掘立柱建物、1号土坑、2・3号溝については時期の特定はできないが、1・2・5号掘立柱建物、1号土坑については土師器片や埋土の状況から、2・3号溝については土師器片の出土から、中世期の所産と考えて差し支えないと思われる。

註 1　行時桂子編 『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 81・87 集 日田市教育委員会 2007・2008 年

註 2　渡邊　隆行 「平島遺跡Ｄ地点」『平島遺跡Ｄ地点、塔ノ本古墳、祇園原遺跡 2 次、長迫遺跡Ｃ地点、長迫遺跡Ｄ地点、尾漕遺跡 6 次』 日田市埋蔵文化財調査報告書第 28 集　日田市教育委員会 2001 年

註 3　高橋　徹編 『草場第二遺跡』大分県教育委員会 1989 年

註 4　註 2 と同じ （報告中の 28 頁註 4）

註 5　註 2 と同じ （報告中の 41 頁）

註 6　賀川光夫編 『法恩寺古墳』 日田市教育委員会 1959 年

註 7　渡邊隆行編 『慈眼山遺跡 7 次』日田市埋蔵文化財調査報告書 第 95 集 日田市教育委員会 2010 年

註 8　坂本嘉弘編 『慈眼山遺跡』国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第 55 集　2011 年

## 第１表　出土土器観察表

| 挿図番号 | 遺構名 | 種別 | 器種 | 法量 | | | | 調整 | | 胎土 | 焼成 | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 胴部径 | 底径 | 器高 | 外面 | 内面 | | | 外面 | 内面 | |
| 第５図１ | １号住 | 弥生 | 甕 | (16.2) | (13.8) | － | (11.5) | ナデ | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 黒褐色 | ２と同一個体の可能性あり。 |
| 第５図２ | １号住 | 弥生 | 甕 | － | － | － | (10.3) | 不明 | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 暗黄褐色 | 暗黄褐色 | １と同一個体の可能性あり。 |
| 第５図３ | １号住 | 弥生 | 壺 | (14.8) | － | － | (6.7) | 不明 | 不明 | ＡＢＣＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | ４と同一個体の可能性あり。 |
| 第５図４ | １号住 | 弥生 | 壺 | － | － | 5.9 | (12.2) | 不明 | ハケ | ＡＣＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | ３と同一個体の可能性あり。 |
| 第５図５ | １号住 | 弥生 | 壺 | － | － | － | (26.9) | 不明 | ナデ | ＡＢＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 黒褐色 | |
| 第５図６ | １号住 | 弥生 | 甕 | － | － | － | (15.0) | 不明 | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | |
| 第５図７ | １号住 | 土師 | 坏 | (13.4) | － | (8.0) | 3.7 | 不明 | 不明 | ＡＣＤＥ | 良好 | 燈色 | 燈色 | |
| 第５図８ | １号住 | 土師 | 坏 | (14.8) | － | － | 6.2 | 不明 | 不明 | ＡＣＥ | 良好 | 黒色 | 黒色 | |
| 第７図１ | ２号住 | 弥生 | 甕 | (28.0) | (25.2) | － | (18.3) | 不明 | 不明 | ＡＣＤＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | P2 出土 |
| 第７図２ | ２号住 | 弥生 | 甕 | (32.3) | － | － | (12.3) | ハケ | 不明 | ＡＣＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | P4 出土 |
| 第７図３ | ２号Ｂ住 | 弥生 | 甕 | － | － | － | (6.2) | ハケ | 不明 | ＡＣＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | |
| 第７図４ | ２号Ａ住 | 弥生 | 甕 | － | － | (6.6) | (10.3) | 不明 | 不明 | ＣＤＥ | 良好 | 黄燈色 | 灰黄褐色 | |
| 第７図５ | ２号Ｂ住 | 弥生 | 高坏 | (30.4) | － | － | (2.0) | ナデ | ナデ | ＡＢＣ | 良好 | 淡燈色 | 淡燈色 | |
| 第７図６ | ２号Ｂ住 | 弥生 | 高坏 | (27.6) | － | － | (8.3) | 不明 | 不明 | ＡＢＣ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | 内外面ともに赤色顔料付着 |
| 第７図７ | ２号Ｂ住 | 弥生 | 高坏 | － | － | 15.8 | (18.3) | 不明 | ナデ | ＡＣ | 良好 | 赤褐色 | 黄燈色 | ６と同一個体の可能性あり。 |
| 第７図８ | ２号Ａ住 | 弥生 | 壺 | － | － | － | (3.7) | 不明 | 不明 | ＡＣ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | |
| 第７図９ | ２号Ｂ住 | 弥生 | 壺 | － | － | － | (6.4) | ミガキ | ナデ | ＡＣＧ | 良好 | 灰黄褐色 | 黄燈色 | |
| 第12図１ | ４号建物 | 土師 | 坏 | (12.2) | － | (7.2) | 3.6 | 不明 | 不明 | ＡＣＤ | 良好 | 燈色 | 燈色 | 底部糸切り |
| 第12図２ | ４号建物 | 土師 | 坏 | 12.7 | － | 7.4 | 3.8 | ナデ | ナデ | ＡＣＤ | 良好 | 燈色 | 燈色 | 底部糸切り |
| 第12図３ | ４号建物 | 土師 | 坏 | (13.3) | － | (8.0) | 3.7 | ナデ | ナデ | ＡＣＤ | 良好 | 褐色 | 褐色 | 底部糸切り |
| 第12図４ | ４号建物 | 土師 | 坏 | (15.1) | － | (9.7) | 3.9 | 不明 | 不明 | ＡＣＤＥ | 良好 | 燈色 | 燈色 | |
| 第12図５ | ４号建物 | 土師 | 坏 | 12.6 | － | 7.7 | 3.2 | 不明 | ナデ | ＡＣＤ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | 底部糸切り |
| 第12図６ | ４号建物 | 土師 | 坏 | 13.4 | － | 7.7 | 3.6 | ナデ | ナデ | ＡＢＣ | 良好 | 燈色 | 燈色 | 底部糸切り |
| 第12図７ | ４号建物 | 土師 | 坏 | － | － | 7.6 | (1.4) | ナデ | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 燈色 | 燈色 | |
| 第12図８ | ４号建物 | 土師 | 坏 | － | － | (8.0) | (1.4) | ナデ | ナデ | ＡＣＤ | 良好 | 燈色 | 燈色 | 底部糸切り |
| 第12図９ | ４号建物 | 土師 | 坏 | － | － | (7.6) | (2.0) | ナデ | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | 底部糸切り、板状圧痕 |
| 第14図１ | １号土坑 | 土師 | 皿 | (9.5) | － | (7.7) | 1.8 | ナデ | ナデ | ＡＣＤ | 良好 | 燈色 | 燈色 | |
| 第14図２ | １号土坑 | 土師 | 皿 | － | － | － | (2.1) | ナデ | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | |
| 第19図１ | １号溝 | 土師 | 皿 | － | － | － | (1.3) | ナデ | ナデ | ＡＤＥ | 良好 | 燈色 | 燈色 | |
| 第19図２ | １号溝 | 青磁 | 碗 | － | － | (6.6) | (3.2) | － | － | － | 良好 | 青緑色 | 青緑色 | 龍泉窯 |
| 第19図３ | ２号溝 | 弥生 | 甕 | － | － | － | (4.4) | 不明 | 不明 | ＡＣＥ | 良好 | 浅黄褐色 | 浅黄褐色 | |
| 第19図４ | ２号溝 | 弥生 | 甕 | － | － | (6.0) | (6.2) | 不明 | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 燈色 | 灰黄色 | |
| 第19図５ | ２号溝 | 弥生 | 壺 | － | － | (5.8) | (9.7) | 不明 | ナデ | ＡＣＤＥ | 良好 | 赤褐色 | 黄燈色 | |
| 第19図６ | ２号溝 | 須恵 | 坏蓋 | 11.5 | － | － | 4.5 | ケズリ | ナデ | ＡＢＥ | 良好 | 灰白色 | 灰白色 | |
| 第19図７ | ３号溝 | 土師 | 坏身 | (10.4) | － | － | (3.9) | ナデ？ | 不明 | ＡＢＣ | 良好 | 淡燈色 | 淡燈色 | |
| 第19図８ | ２号溝 | 須恵 | 坏身 | 10.1 | － | － | 4.6 | ケズリ | ナデ | ＥＦ | 良好 | 灰白色 | 灰白色 | |
| 第19図９ | ２号溝 | 須恵 | 坏 | (15.8) | － | (9.6) | 5.4 | ナデ | ナデ | ＡＢＣＥ | 不良 | 灰黄色 | 灰黄色 | |
| 第19図10 | ２号溝 | 土師 | 碗 | － | － | － | (2.7) | 不明 | 不明 | ＡＣ | 良好 | 淡黄色 | 淡黄色 | |
| 第19図11 | ３号溝 | 土師 | 甕 | － | － | － | (8.5) | タタキ | ハケ | ＡＣＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | |
| 第19図12 | ３号溝 | 土師 | 甕 | (19.4) | － | － | (9.1) | タタキ | 不明 | ＡＣＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | |
| 第19図13 | ３号溝 | 弥生 | 高坏 | － | － | － | (14.7) | ナデ | ナデ | ＡＣＥ | 良好 | 黄燈色 | 黄燈色 | |
| 第21図１ | １号甕棺 | 弥生 | 甕 | (45.6) | 70.0 | － | 11.0 | ハケ | ハケ | ＡＣＤＥ | 良好 | 明黄褐色 | 明黄褐色 | 大型成人用甕棺 |
| 第24図１ | 一括 | 弥生 | 甕 | － | － | 6.0 | (5.5) | 不明 | 不明 | ＡＣＥ | 良好 | 燈色 | 黄燈色 | |
| 第24図２ | 一括 | 青磁 | 碗 | － | － | － | (2.3) | － | － | － | 良好 | 青緑色 | 青緑色 | |

※ 法量の単位はcm。（）は残存と復元値を示す。

※ 胎土は、Ａ角閃石、Ｂ石英、Ｃ長石、Ｄ赤色粒子、Ｅ白色粒子

## 第２表　出土鉄器観察表

| 挿図番号 | 遺構名 | 器種 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第23図１ | 石室 | 不明 | (5.1) | (2.1) | 0.2 | (9.6) | 木質が残存 |

※ 単位はcm。（　）は現存長・重。

①調査地点空撮（北から）

②調査地点空撮（南から）

③調査地点空撮（上から）

④調査地点空撮（北東から）

⑤調査地点遠景（北から）

⑥調査地点空撮（上から）

⑦調査地点遠景（北から）

⑧調査地点空撮（上から）

写真図版 2

①１号竪穴住居完掘写真（北から）

②２号竪穴住居完掘写真（北から）

③１号掘立柱建物完掘写真（西から）

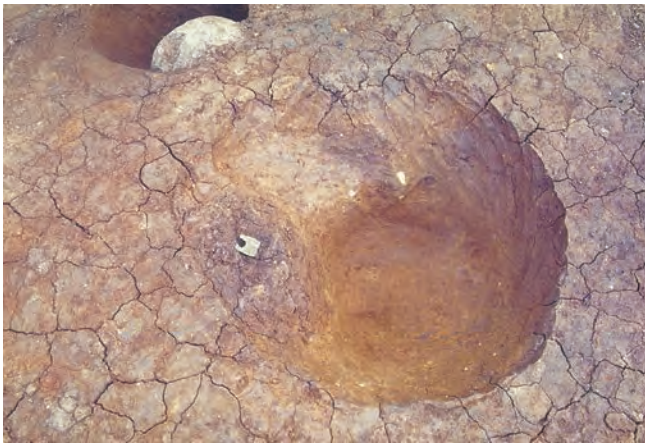
④２号掘立柱建物完掘写真（西から）

⑤３・４号掘立柱建物完掘写真（東から）

⑥３号掘立柱建物完掘写真（西から）

⑦４号掘立柱建物完掘写真（東から）

⑧４号掘立柱建物Ｐ５写真（西から）



①１号土坑発掘写真（東から）

②４号土坑発掘写真（北から）

③１号掘立柱建物完掘写真（西から）

④２号掘立柱建物完掘写真（西から）

⑤２号溝土層断面写真（東から）

⑥２号溝遺物出土写真（北から）

⑦３号溝完掘写真（南から）

⑧３号溝完掘写真写真（西から）

写真図版 4

①１号甕棺墓発掘写真（上から）

②１号甕棺墓人骨出土写真（上から）

③１号甕棺墓完掘写真（東から）

④１号甕棺墓完掘写真（西から）

⑤１号石蓋土壙墓発掘写真（西から）

⑥１号石蓋土壙墓完掘写真（西から）

①古墳石室発掘写真（北から）

②古墳石室発掘写真（南から）

③古墳石室発掘写真（北から）

④古墳石室発掘写真（南から）

⑤古墳石室発掘写真（西から）

⑥古墳石室発掘写真（西から）

写真図版 6

①古墳石室完掘写真（西から）

②古墳石室完掘写真（南から）

③古墳石室完掘写真（北から）

④古墳石室完掘写真（北から

⑤古墳石室完掘写真（南から）

⑥古墳石室完掘写真（東から）

① 第 5 図 1

② 第 5 図 2

③ 第 5 図 3

④ 第 5 図 4

⑤ 第 5 図 5

⑥ 第 5 図 6

⑦ 第 5 図 7

⑧ 第 5 図 8

⑨ 第 7 図 1

⑩ 第 7 図 2

⑪ 第 7 図 3

⑫ 第 7 図 4

⑬ 第 7 図 6-1

⑭ 第 7 図 6-2

⑮ 第 7 図 7

⑯ 第 7 図 8

⑰ 第 7 図 9

⑱ 第 12 図 1

## 写真図版 8

① 第 12 図 2

② 第 12 図 3

③ 第 12 図 4

④ 第 12 図 5

⑤ 第 12 図 6

⑥ 第 12 図 7-1

⑦ 第 12 図 7-2

⑧ 第 12 図 8

⑨ 第 12 図 9-1

⑩ 第 12 図 9-2

⑪ 第 14 図 1

⑫ 第 14 図 2-1

⑬ 第 14 図 2-2

⑭ 第 19 図 1-1

⑮ 第 19 図 1-2

⑯ 第 19 図 2

⑰ 第 19 図 3

⑱ 第 19 図 4

① 第 19 図 5

② 第 19 図 6

③ 第 19 図 7

④ 第 19 図 9

⑤ 第 19 図 10

⑥ 第 19 図 11

⑦ 第 19 図 12

⑧ 第 19 図 13

⑨ 第 21 図

⑩ 第 23 図

⑪ 第 24 図 1

⑫ 第 24 図 2

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ひらしまいせき |
| 書名 | 平島遺跡 |
| 副書名 | Ｅ地点の調査報告 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 市内遺跡発掘調査報告 / 日田市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 11/ 第 107 集 |
| 編著者名 | 土居和幸・舟橋京子・田中良之 |
| 編集機関 | 日田市教育庁文化財保護課 |
| 所在地 | 〒 877-0077　日田市南友田町 516-1 |
| 発行年月日 | 2013 年 2 月 28 日（平成 25 年 2 月 28 日） |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 平島遺跡<br>Ｅ地点 | 大分県日田市<br>大字有田<br>字スキサキ | 44204-6 | 651057 | 33°<br>19′<br>48″ | 130°<br>57′<br>57″ | 19980318<br>～<br>19880712 | 554 ㎡ | 畑地造成 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平島遺跡<br>Ｅ地点 | 集落<br>墓 | 弥生<br><br>古墳<br>中世 | 竪穴住居 1 基、甕棺墓 1 基、石蓋土壙墓 1 基<br>竪穴住居 1 基、石室 1 基<br>掘立柱建物 4 棟、土坑 1 基、溝 3 条 | 弥生土器、石器<br><br>須恵器、土師器、陶磁器 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 平島遺跡Ｅ地点は、有田川流域の標高約 120 ｍに立地する遺跡で、調査では弥生時代中期後半の竪穴住居、弥生時代後期後半から古墳時代初めの大型成人用甕棺墓や石蓋土坑墓、古墳時代初めの竪穴住居、後期（6 世紀）の古墳石室、中世の掘立柱建物、溝などの遺構が発掘され、各時代の土器類などが出土している。大型成人用甕棺墓は、隣接する平島遺跡Ｃ地点と合わせて 4 基確認されたことになり、日田市東部の有田川流域では唯一の発見例である。石室（塔ノ本 3 号墳）は、古墳時代後期（6 世紀前半）の所産と考えられる。 |

平島遺跡 － E 地点の調査報告 －
市内遺跡発掘調査報告 11
日田市埋蔵文化財調査報告書第 107 集
2013 年 2 月 28 日

編集　日田市教育庁文化財保護課
877-0077　大分県日田市南友田町 516-1
発行　日田市教育委員会
877-0077　大分県日田市南友田町 516-1
印刷　尾花印刷有限会社
877-0026　大分県日田市田島本町 8-8